第３章　セミナーおよびシンポジウムの開催

１．セミナー開催内容について

（１）開催の趣旨と目的

沖縄県では、沖縄観光の課題解決策の一つとして、海外において多くの導入事例がみられる「カジノを含む統合リゾート（IR)」について、本県に導入した場合のモデルやその経済効果の試算及び課題や対応策などについて、様々な視点から検討している。

今回のセミナーは、沖縄の将来を担う大学生等を主な対象とし、ラスベガスやマカオの統合リゾートを実際に見てきた方々から発表を行っていただくとともに、学生から統合リゾートに対する意見等を広く聴取し、将来の沖縄観光における統合リゾートの意義や役割等について理解を深めることを目的として開催した。

（２）開催概要

1）開催概要

開催日時：平成２４年１２月２０日（木）14：00～16：00

場　所　：沖縄コンベンションセンター　（宜野湾市）　会議棟　B-1

参加対象：県内大学生・専門学校生（50～80 名程度）参加費無料

配布資料：プログラム、沖縄県事業報告資料、アンケート等

開催プログラム概要

①あいさつ　沖縄県文化観光スポーツ部長　平田　大一

②県事業報告　（10 分）

報告者：沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課長　嵩原　安伸

③マカオの観光について（40 分）

発表者：琉球大学観光産業科学部観光科学科　上地ゼミ　ゼミ生（3年次）

④私がみたラスベガス（20 分）

発表者：㈶沖縄観光コンベンションビューロー　森　清香　氏

⑤意見交換（40 分）

対応者：琉球大学観光産業科学部観光科学科
上地　恵龍　教授　および　ゼミ生
㈶沖縄観光コンベンションビューロー　森　清香　氏

2）出演者プロフィール

（財）沖縄観光コンベンションビューロー　森　清香氏

森氏は、2009 年から（財）沖縄観光コンベンションビューローで観光産業発展と外国人観光客を増やすため海外プロモーション業務を担当。ホスピタリティー産業において長い業績と経験を持つ。1999 年にはネバダ州立大学ラスベガス校でホテル経営学の学士号を取得。2010 年には、将来の観光業界を率いるために沖縄県の高度人材育成モデル事業にて選定され、2012 年に世界最高峰のスイスローザンヌホテル経営科大学院大学にて修士号を日本人で初

めて取得。また、2000 年以降ホスピタリティー産業にてユナイティド航空のキャビンアテンダントやオークウッドジャパンでハウスキーピング係長など様々な職を経験しており、高校から渡米して 14 年間、特にラスベガスの著しい成長と共に VIP の世話役など、重要な役割に従事するなど多くの経験を持っている。

学位等≫University of Nevada, Las Vegas, Bachelor of Science in Hotel Administration
EcoleHoteliere de Lausanne, Master of Hotel Administration, Executive Master of Business Administration

琉球大学観光産業科学部観光科学科　上地　恵龍教授

琉球大学観光産業科学部観光科学科教授（観光産業科学部副部長兼観光科学科長）。

沖縄、北京、台北、デュッセルドルフ（ドイツ）、ハノイ（ベトナム）など、国内外でホテルの開業や運営に携わる。2004 年に首里観光株式会社の代表取締役、ＪＡＬホテルズ本社の取締役専務執行役員など、海外での勤務実績とともに観光関連企業の要職を担った経験と実績が評価され、琉球大学において観光経営・マーケティングの教鞭を執る。市場特性を理解したプロモーションの展開や市場ニーズに適応する観光関連産業の人材育成に精通している。

学位等≫琉球大学法文学部商学科　商学士

主な所属学会≫日本観光ホスピタリティ学会、日本ホスピタリティ・マネジメント学会、ツーリズム・ホスピタリティ教育研究会

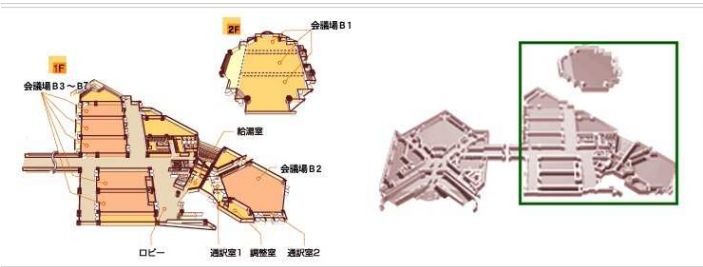
琉球大学観光産業科学部観光科学科　上地ゼミについて

演習テーマ「顧客満足度・社員満足度を軸とした観光ビジネスの経営」

顧客（来訪者）中心の観光ビジネスの日常において顧客満足度（CS）の重要性の認識、モデルとなる産業（観光地）の実地調査・分析などを通じて、その手法および評価基準を体得する。また、観光ビジネスの長期的・持続的な成長循環を実現していくためには社員満足度（ES）を実践していくことが特に重要であることから、ゼミの仕上げとして具体的な ES の実例を学び、社員満足経営の本質を理解することが目的である。

3）開催会場

沖縄コンベンションセンター　会議棟　B-1



（３）議事録

≪出席者名簿≫

氏　名	団体／所属	役　職
上地　恵龍	琉球大学　観光産業科学部　観光科学科	教授
平田　大一	沖縄県　文化観光スポーツ部長	部長
栗田　朗	株式会社　博報堂 カジノ・エンタテインメントプロジェクト	代表
下地　芳朗	沖縄県　文化観光スポーツ部	観光政策統括監
嵩原　安伸	沖縄県　文化観光スポーツ部観光政策課	課長
森　清香	㈶沖縄観光コンベンションビューロー	
上地ゼミ　ゼミ生	琉球大学　観光産業科学部　観光科学科	大学生

≪質疑応答議事録≫

【上地教授】本日は師走の慌ただしい中、皆様にセミナー・プレゼンに参加していただきありがとうございます。学生の発表でありながら沖縄県より配慮いただき、このような素晴らしい会場で発表させていただき、一番参考になったのは私どもの生徒ではないかと思います。これから一般の皆様から琉大の生徒、または森さんに質問がありましたらよろしくお願いします。

【上原（学生）】琉球大学観光科学科２年次の上原と申します。３年生のプレゼンを最後だけ見せていただいたのですが、想像していたよりも遥かにうまくできていて驚きました。来年僕たちがこの様なことをやるような機会があったら３年生のように、きちんとやって自分のキャリアに活かしていきたいと思いました。

【上地教授】こちらから質問してもよろしいですか。これまで IR について考えた事はありますか。

【上原（学生）】出身が糸満市なので、過去にそういう話がありましたが、その時は小学生・中学生ぐらいだったのですが、やはり不安の方が大きかったと思います。

【上地教授】今日の３年生のプレゼンを聞いてみてどう思いましたか。

【上原（学生）】不安というのは勿論治安面だったりしたのですが、今回森さんの話を聞いてみて、住み分けがきちんとできていて、見えないラインで区切られていることが感じられました。それを地域にも周知徹底させておけばカジノも悪くはないのかなと考え方も変わって

きました。
【髙江洲（学生）】琉球大学観光産業科学部産業科学科１年次の髙江洲と申します。私も実際に香港・マカオに旅行した事が有り世界遺産やカジノを見ました。規模にもよると思いますが、３年生の方々がプレゼンしていた船のカジノをつくる時はどれくらいの費用がかかるのかが気になりました。

【上地教授】今までの構想の中で費用とか出資関係とか検討されたと思いますが、もし学生たちに参考になるような情報がありましたら是非何かお願いします。

【嵩原課長】沖縄統合リゾートモデルという形でいろいろなモデルの経済効果を出したのですが全て陸上タイプです。船上カジノの話はいろいろ意見として出るのですが、経済効果、どれぐらいの規模が必要なのかというのは、まだ出していないです。

【栗田氏】船上カジノを行う場合のコストについて、手元に詳細な数字は持っていませんが、先ほど紹介がありましたハウステンボスにおける中国と結ぶクルーズ船はカリブ海で航行していたクルーズ船を改造し、元々あったカジノを拡張して運航しているのですが、船を購入する金額とは別に今回の航行のために内装を変えてカジノを充実させる為のコストはそれほどかかっていないと思います。おそらく数十億円単位ではないかと推測しています。
　クルーズ船でのカジノはお金の消費が公海上となります。一方でランドカジノの場合、沖縄に多くの消費をもたらしてくれるお客様を招いてくれる可能性があるかと思います。ランドカジノとクルーズカジノの違いをどう考えるのか、今回発表された皆さんが研究を深めていただければ面白いかなと思いました。
　それからクルーズカジノの場合、それほどお金がかかりません。一方でランドカジノの場合は土地を手配して、そこに大きな建物を開発し、そこにお客様を呼べるような、すばらしい設備をつくるわけです。そこにカジノという部分が一部にあることでマカオやシンガポールでは開発に関わる大きな投資を地域の外から呼び込むことに成功しました。こういった投資を呼び込み地域に還流させる効果と、クルーズ船の場合はどのような効果が生まれるかという事を比較しながら IR をご検討されるのであれば、沖縄にふさわしい形とは何なのかが見えてくるかと思います。是非次回に向けてこのような視点をご検討されても面白いのではないかと思いました。

【上地教授】大変貴重、且つ専門的な御意見ありがとうございます。確かに学生の皆さんもそのような深い研究も行っていませんので、そのように懸念されている問題を解消するためには、提案にあったような研究が非常に重要になってくるのではないかと思います。他にどなたかご質問・ご意見ありましたら是非お願いしたいと思います。

【平田部長】学生たちに例えば森さんの話を聞いて、少し考える事、感想を聞いてみたいです。

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生）】プレゼンお疲れさまでした。森さんがラスベガスの方に滞在

されていた間の話で印象的だったのが、しっかりローカル向けの方と、観光客向けに住み分けがなされているという点です。実際、私達がマカオに行った時に印象的だったのが、東洋のローカルの人が住んでいる景観とカジノが立ち並んでいる景観が、近接していたからかもしれないのですが、混同している感じがしました。しかし、ラスベガスではしっかり分けられているのだなと感じ、マカオとはあまりに違っているので驚きましたが、沖縄ではそのようにはなって欲しくないとも感じました。

【森氏】ありがとうございました。確かにラスベガスは土地も広く、考えられて開発されていたので、道がなかったところに道が整備されていたり、ストリップの周辺から少し離れたところに住宅街がありました。ストリップ周辺には地元用のカジノ・エンターテイメントの備わったコンサート会場や映画館などの施設があり、地元の人がストリップに行くのはアニバーサリーや、誰かのバースデーや友達が遊びに来た時など、めったなことが無いとストリップのカジノに行かなかったと思います。

【上地教授】森さんがおっしゃっていることは、予めしっかりした都市計画に基づいた開発についてですね。地域住民が住んでいる場所と、この様なエンターテイメントの場所をきちんと整理しなくては、マカオのような小さな場所で既存の住民の生活の中にカジノを取り入れるとその様な現象（ゼミ生が言っていたような）が起こります。

ただ沖縄県で検討しているのは、広い敷地の中で、ある意味隔離しているところを確保した上で作るという構想だと思いますがいかがですか。

【平田部長】まだそこまで具体的な話はなくて、グランドデザインを描きながら沖縄の観光の中での可能性と課題をしっかり描いていかないといけない。ですから県が果たす役割は、沖縄という、全体を見た上でのプロデュースをどうしていくかを含めて考えていかないといけない。

カジノ導入となった場合は観光の分野の検討だけではありません。日本でいえば警察、例えば県では福祉保健部、つまりゲーミングを牽引する際、それをどうフォローするか、皆で真剣に考えていかなくてはなりません。沖縄全体のデザインに関わるので、文化観光スポーツ部だけでは抱えきれない大きな課題があります。そのため、企画部、交通政策課、病院、各分野で大きなグランドデザインを描きながら考えていかないといけない事もあり、国の動きを見ながら、県としても、どこまで、どの範囲まで真剣に話をすればよいのかと考え、悩みながら作業を進めています。

先ほどの船上カジノは面白いアイデアで、海の活用という点では沖縄の雰囲気に合っている。また、船の中にラグーンがあるようなイメージも面白いなと思いました。モータースポーツイベントも経済波及効果で 292.94 億円という話がありましたが、その国際的イベントを実施するためのインフラ整備にはどれだけかかるのか、規模がどれくらい必要か、費用対効果として見合うものなのか、イベントでの騒音が環境にどう影響を与えるのか、さまざまな要素を総合的に考える必要もあります。皆さんの等身大の思いがストレートに聞けたので良かったと思います。

沖縄県として、大きなグランドデザインを描いていく意味では複眼的に見ていくべきであ

るという事を、改めて、お互いに理解できればよいと思います。
【上地教授】ありがとうございます。確か３年生の皆さんは地域（マカオ）の皆さんにアンケートを取ったということですが、地元（マカオ）の皆さんの意見はどうですか。

【上地ゼミ　ゼミ生(３年生)】全部で12名の方にアンケートを取ることができたのですが。
「カジノがマカオ経済に必要と考える人」が、はい８名、いいえ３名。
「治安が悪くなると思うか」が、はい５名、いいえ４名、どちらともいえない２名。
「健全な娯楽だと思いますか」が、はい１名、いいえ10名。
「カジノに地元の人が行きますか」が、はい３名、行かないが９名いました。
このカジノに行くという人の中で、「月に１回行く」、「月に２回行く」、「10 日に１回行く」という人がいました。

【上地教授】一般の観光地で出会った観光客のアンケートはどうでしたか。

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生)】マカオに来た目的を尋ねたところ、場所はマカオフェリーターミナル、セナド広場（世界遺産）と、ヴァスコ・ダ・ガマ公園の３箇所でアンケートをしました。「カジノに行く」・「カジノ目的でマカオに来た」と答えた方がどの地区でも３名。「世界遺産目的で来た」と「ショッピング」が１位と２位でどちらとも６～７名おり、アンケート場所がカジノのコタイ地区ではなかったので、それも結果に影響したと思うが、世界遺産とショッピングが多くてカジノ目的の方があまりいませんでした。

【上地教授】データの他に何か補足したいこと、インタビューをして感じたことはありますか。

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生)】観光客の方にはこちらから直接話しかけながらやった。プレゼンの中にもあったように中国本土の観光客が多く、私たちのアンケートでは中国本土だけではなくて韓国や、マレーシア、フィリピンといったアジア諸国とヨーロッパの方も何名かいた。印象的だったのが滞在時間の短さで、「どういったところを回りましたか？」という質問に対して「今から回る」「来たばっかり」と答えており、聞いてみると日帰り観光と答える観光客が多かった。マカオの観光地が中国本土から気軽に来られる観光地として認知されているのかなという印象を受けました。

【上地教授】アンケートの人数は妥当か分かりませんが、今の話によると２泊、３泊するのはカジノのお客さんが多い。観光ではツアーで来られたお客さんはマカオが高級ホテルばかりなので、香港に行って宿泊先を探すというのが多いのでしょうか？

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生)】そのような印象を受けました。

【上地教授】他に何か補足して、プレゼンの中で説明できなかった部分、プレゼンの他に自分たちが感じた意見があったらどうぞ。

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生)】３年次の小畑と申します。私たちは事前に琉球大学の学生にアンケート調査を行ったのですが、実際にプレゼンに出て来たアンケート結果はマカオについてのイメージだけが出てきたと思うのですが、その他にも沖縄の観光地について知っているところを教えてください等書いたのですが、出てきた意見からは、沖縄に住んでいる学生として沖縄の世界遺産の知名度が低いのかなと感じました。マカオについてのイメージもカジノが断トツで多かったので、その辺のイメージアップも必要と感じました。

【上地教授】地元に住んでいる人が自分たちの観光資源、世界遺産を認識するべきという意見です。このような会合を通して、若い皆さんに関心を持ってもらいたいと思います。

【一般（宮里氏)】宮里といいます。琉球大学で働いています。質問は、マカオ大学もありますが地元の若い人に話を聞いたことはありましたか。

【上地ゼミ　ゼミ生（３年生)】マカオ大学の学生１名だけ女性の方に聞きました。その方は月２回カジノへ行くと言っていました。

【一般（宮里氏)】次回は同世代の人にも意見を聞いてみて、自分の将来や、どのようなマカオにしたいのか、IR が良いか悪いか含めたディスカッションの場が出来ればよいのかなと思いました。

プレゼンで気になったのが、規模の比較で東京ドームを使っていましたが、せっかくなのでセルラースタジアムやコンベンションセンターを使った方が分かり易いですし、沖縄を PR するのも良いのではないかと思います。

もう一つは、モータースポーツの話がありましたが、沖縄県は車社会ということもあり、モータースポーツのレベルが高い。沖縄県が認知していない、モータースポーツは非常に可能性があると思います。マカオだけでなくシンガポールもそれで観光客を誘致しているので、沖縄の中で騒音の問題があるのであれば、例えば宮古島でやる場合は環境対応型の太陽電池のカーレースをやる等、沖縄型のモータースポーツをするというアイデアが皆さん方から出てくればよいと思います。

【上地教授】モナコやマカオも狭い道路でやっており、基地の中や島でも出来ると思います。また、常設ではなく、今まで沖縄に来ていない観光客はまだ大勢いるので、そういう客層が一回行ってみようという気持ちになるのでは、という発想から出て来た内容だと思います。

【島田（学生)】観光科学科２年次の島田です。カジノを沖縄に導入する場合に、沖縄イメージ戦略で、イメージをどのように出していくのかという事です。法案が通って他の県もカジノを導入するという時に沖縄に有利な部分はどのようなものでしょうか。ラスベガスが発展する時期にラスベガスにいたという事で、その段階での住民の反応、私はマイナスの反応があったのではないかと思うのですが、そのような調査はされたのか、カジノで得た利益をどれだけ地元に還元出来たのか。そこをお聞きしたいと思います。

【上地教授】ありがとうございます。イメージ戦略にはまだ IR の構想が入っていないが、大いに注意しなければなりません。今一番国内で有力とされているのがお台場ですが、同じ国内においても競合施設が出てくる。競合している施設に関しては懸念しておかなくてはいけない。ラスベガスについては、実際人口はどれくらいですか。

【森氏】1999 年から 2004 年の間、人口が 20.1%増加しました。これを 1 時間単位にすると毎時間 2.13 名がラスベガスに引っ越してきたことになります。これはリーマンショックの前でしたが、ラスベガスにいた時はカジノで働くことが誇りで、観光客が来ても楽しめる観光地となっていました。沖縄の場合もその様にしていかないといけない。確かに問題は様々で、カジノでの急速な発展で、大学に行かなくてもカジノで働くことができたので、ネバダ州の大学進学率は悪かった。でもそれが悪いのではなく、カジノで実務経験を積んでから大学に進学するという人もいました。

【上地教授】人口は、カジノ関連施設で働く人が引っ越してくることにより増加の影響があると思う。まさしくこれから沖縄はどうするのか、一般の仕事もありますが、すべてプロの仕事ですので、マカオでもそうですが、ディーラーやエンターテイナーが、外部からショー期間だけ一時期引っ越してくることなどで、多少人口増になると思います。

【平田部長】森さんの話の中で印象に残ったのが、大学の中でゲーミングを学べる、ホスピタリティ産業という名前が位置付けられていることでした。我々が考えている以上に学問としての扱いがしっかりしていることが、誇りを持って働くことにつながると思う。そのような面で言うと、日本においては、まだまだ博打やギャンブルというイメージですよね。文化の違いが根底にあると思う。海外に行った人の話を聞くと必ずしも悪いイメージではない。日本人や、沖縄の人は自分たちの尺度で考えてしまうので、推進か反対かという話は、立ち位置が違うので難しいと思います。沖縄が求める観光の形の中で、シンガポールやマカオのような IR は必要なのか、という事を含めて考えていく段階にあると思う。まだ合法化されていないならなぜそれを議論するのかという問題になる。

県の立場としては、県民が判断する段階において、判断できる論点をしっかり示して説明義務を果たしていくこと。どちらをとるかは自分で判断しなくてはいけない。どこまで関心事をみんなに持ってもらうかという事が大きなテーマであると思うが、まだ入口まできていない。一番良くないことは黙っていること、無視をすること。今日のプレゼンが面白かった点は、自分たちの等身大の思いで向き合ったことで、今後も検証・研究等勉強をしなくてはいけない。その上で県民が IR はいりませんといったら、県はそのような方向性にぐっとシフトする必要があるし、IR 議論の中で沖縄の魅力を発見して議論にしていきたいです。

美ら海水族館が立ち寄り率 43.7%。首里城が 40.3%、けれど世界遺産である勝連城・今帰仁城が 3%という状況があります。今沖縄にあるものを活かしきれていないので、それを活かしながら新しいものを議論していきたいというのが本音です。これからも、沖縄県に対してもこのような形で開催してくれたら良いと思います。

【上地教授】平田部長が言ったように、現状としての沖縄観光の資源の魅力をまだまだ十分理解しないままでいる、タイムラグみたいなものもあります。マカオもラスベガスも IR と呼べるまでどれだけの時間と歴史がかかったのか。

沖縄は何もないうちにすぐに IR だというのはどうなのかと個人的に思う。ラスベガスはどうですか。

【森氏】プレゼンでもありましたが、2005 年、ラスベガスは 100 歳を祝いました。カジノが合法化したのが 1930 年なので、それから考えると 70 年くらい積み重ねた結果が今のラスベガスです。ですのですぐには無理ですね。

【上地教授】非常に長いプランニングと計画がついて、どれだけスピードアップできるのか、あるいはやりながら同時進行できないのか、沖縄の観光資源をもう一回見直しながら次の構想を作っていく。おそらく A か B か非常に選びにくい内容でもあり、今持っているものを磨いて魅力として発信していこうということも必要ではないかと思う。統括官何かご意見はありますか。

【下地統括官】カジノ・IR について考えるとき、それは将来を考えた時、我々にとっての IR でもあるが、皆さんにとっての IR でもあります。一般向けも大事であるが、学生の皆さんが今後の沖縄観光をどう考えるか、というきっかけになるのかもしれないと思い今回のような企画を作りました。今回嬉しかったのが、マカオをテーマにした時に、観光地の評価と IR の評価両方を発表いただいた点が良かったです。私も 90 年代香港に 4 年間いましたが、当時のマカオとは大きく変わっています。マカオの人たちにとっても、変わったこと、変わらないこと、これからをどうするかがマカオにとっても大事なことだと思います。世界遺産を含む歴史を大事にしながらマカオという観光地をつくっていこうという気持ちと、ビジネスとしての魅力が大きい。しかし、税収を含めて 70%をカジノに依存するというのはある意味異常だと思います。マカオは、カジノのマカオから MICE やエンターテイメントのマカオに方向転換したいとしています。急激に変わってきたマカオを IR のモデルとして見るのは危険ではないでしょうか。森さんが経験されたラスベガス、シンガポール、また、他にもカジノを導入している地域は多くあるので、そこを見ながら、聞きながら、沖縄にとって観光はどうあるべきか、IR はどうあるべきか考えなくてはいけません。

先月ラスベガスに行きましたが、ラスベガスの人たちが口々に言っていたのが“city of entertainment”。このキーワードがラスベガスのキーワードなのです。エンターテイメントという世界がラスベガスの生きる道。カジノもエンターテイメントの一つであるがそれが全てではない。お金を生み出す装置であるかもしれないが、ラスベガスという街が生きていくのはエンターテイメントであり、食事、音楽もあり、一流のエンターテイメントシティを目指す、というのが彼らのキーワードであるとすれば、我々もみなさんも、沖縄観光のこれからのキーワードはどうあるべきかを考えることが先であって、カジノが先ではないというところから考えていくことがよいかと思いますし、実際に、一人でも多くの人が、カジノがある都市、カジノがある観光地を実際に見てもらった方が議論が進みやすいのかなと思います。実態をあまり知らないままでの議論もあるので、ラスベガスでお会いしたカジノを運営する

会社から IR の魅力と課題について彼らの意見も参考に、我々が勉強する機会を作っていければと思います。

【上地教授】最後に個人的な意見ですが、マーケティングの観点からマカオは同じ中国の領土で中国人観光客が来ており、当然リスクはない。しかし、沖縄としては中国に頼らざるを得ない、日本全体の問題としては、領土の問題を抱えています。韓国人の観光客も領土問題を抱えています。日本全体のマーケティングにおいては、どれだけ欧米人マーケットを取り込めるか、当然インフラ整備も必要ですが、中国人マーケットに頼るのは危ない。採算性からみて、現実このような状態での日本、沖縄に出資してくれるかどうか、道徳論以前の問題もあると思います。

【一般（大城氏）】日経教育グループの専門学校を運営している大城です。先月、観光とリゾートの勉強ということでマカオに行ってきました。私は IR は賛成です。ただそこには解決しなくてはいけない問題もあります。マカオで感じたことが何点かあり、マカオの大学生は、卒業と同時に就職が安定しており、殆どがマカオのカジノに就職しています。初任給は 15 万円で、優秀な学生は 18 万円でディーラーのリーダーになれるとされています。

一方、ご父母の意見と大学の先生の意見では、大学生が卒業しても直ぐに就職できるので努力しなくなった、学ぶ意欲が落ちてきている、それが怖いと言っていました。

何もかも中国に移行した時に、このマカオがどうなるのか親の世代は心配しており、大学生になる前の世代から、僕たちはカジノで働くと言うようです。そしてディーラーのライセンスを取れば一生働けます。ディーラー以外の仕事では、インドネシア、フィリピンから来た人が安い賃金で働いています。これは変わらないという時に、国として学習意欲が失われた時、マカオ大学は国のトップの大学だが、学生が学ぶ意欲がなくなったら国としてカジノに依存していて大丈夫なのかと心配になりました。

マカオでは日本の高級車がたくさん走っており、25～26 才で日本の高級車に乗っていますが、それはマカオでは大学卒業してカジノに就職するとお金が入ってくるが、医療・福祉・教育にお金がかからず、日本のように居酒屋やパブ、クラブもないので、お金を落とす場所がない。だからお金を持て余しているということです。家を買うわけでもなく、貯金しても先が見えている、だから車を買うことしか楽しむことがない。自分の将来の夢がカジノに就職して車を買うことが目標というのが、私には夢や希望がないように感じられました。

税収もカジノに落ちるお金で、消費税もなく、税金もかかっていない。60%はカジノで使いなさい、40%は税金で収めなさいという、それでマカオは成り立っていると聞きました。子供たちが夢を持てないようなことがあって良いのかと感じました。多くのカジノを見て回りましたが、現在マカオには、中国から多くの人が来ています。しかし、富裕層というわけではなく、少々お金を貯めた人がお金を使いたいということで来ています。中国の情勢が悪くなれば来なくなるだろうという心配があります。香港は大陸からの人が来ているが、お金を落とさなくなっており、そこが心配だと言っていたので、大陸に依存しているということや、富裕層の人を呼ぼうと努力していないことと、MICE の部分に力を入れておらず、カジノ一辺倒で走っていることが気になりました。

しかし、統合リゾートは素晴らしいので実現できればよいと思います。日本の税体系から

考えると、厳しいとは思いますが、カジノから入ってきたお金を沖縄の医療、福祉、教育に使うというようにすれば、沖縄の人たちも文句を言わないと思います。きっと沖縄は立地的にもよい場所なので、可能性が相当あるのだと思います。今の若い世代に期待し、マカオの若い世代に負けないような見識を持って、これからの沖縄を本気でどうしたいか、みんなで考えていければ若い世代の力で未来も明るくなると思います。

【上地教授】大城先生ありがとうございました。もう一つ、実は私共は夏にハワイ大学で３週間ほど勉強しました。ハワイでわかったことは、ハワイではカジノはいらないと明確にしていることです。観光資源一本で、あるいは中国人観光客対象にビザも発行していない。これも一つのモデルケースとして、そのような政策もあるのだと思いました。韓国のカジノに行った学生もいますが、各地の置かれている立場、国の政策、環境も違います。どれが沖縄にベストで、どれと組み合わせられるか、県を含めしっかりした考え方を模索中です。これから沖縄県の観光を背負っていく 20 代が一番考えていかなくてはいけない、重要なことかなと思います。それを新たに感じさせていただいた次第でございます。

【嵩原課長】皆さん今日はありがとうございました。那覇で地域説明会をした時に、ある自治会長さんが言われていたのが、「カジノを導入するにしても、しないにしても沖縄の将来に大きな影響がある」と言っていた。それが印象に残っています。

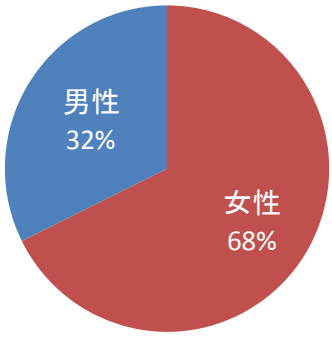
今日皆さんの話を伺っている中で、マカオの立派な観光資源がカジノに埋もれているという話があったが、沖縄ではそのようなことがあってはいけない。沖縄観光のイメージ、ファミリーリゾートを中心とした安全・安心・快適なリゾート地というのが基本だと思いますので、それとどう整合するのか、という視点も重要だと思いました。県でも論点整理を行っています。それを踏まえて、２月６日にはシンポジウムを開催しますので参加して頂ければと思います。ありがとうございました。

【事務局】これでセミナーを終了したいと思います。どうもありがとうございました。

（４）アンケート結果

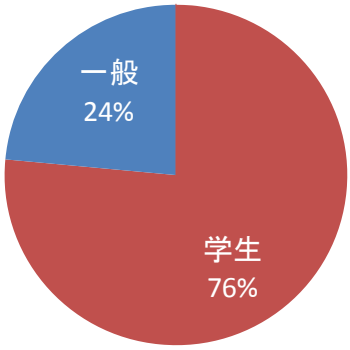
性　別

女性	23	68%
男性	11	32%
無回答	0	0%
合計	34	100%



所　属

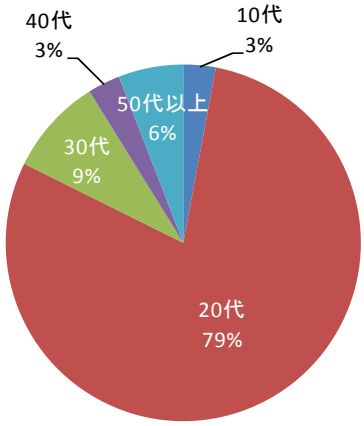
学生	26	76%
一般	8	24%
無回答	0	0%
合計	34	100%



年　代

10 代	1	3%
20 代	27	79%
30 代	3	9%
40 代	1	3%
50 代以上	2	6%
無回答	0	0%
合計	34	100%

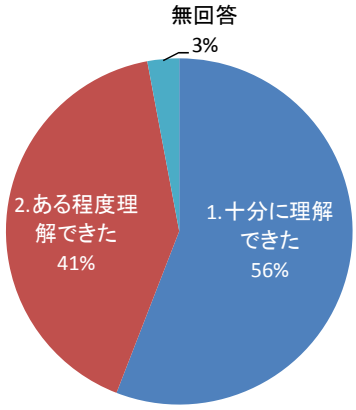
＊居住地は省略



問 1　県の事業報告について、十分に理解いただけましたか。

1.十分に理解できた	19	56%
2.ある程度理解できた	14	41%
3.あまり理解できなかった	0	0%
4.ほとんど理解できなかった	0	0%
無回答	1	3%
合計	34	100%

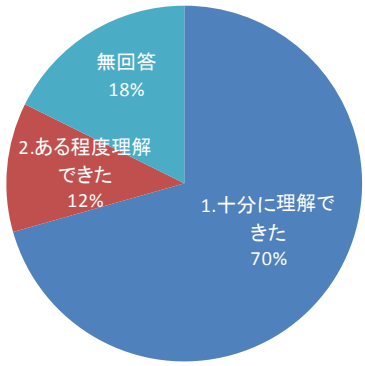
問1　県の事業報告について、十分に理解いただけましたか。



問 2　発表「マカオの観光について」について、十分ご理解いただけましたか。

1.十分に理解できた	24	71%
2.ある程度理解できた	4	12%
3.あまり理解できなかった	0	0%
4.ほとんど理解できなかった	0	0%
無回答	6	18%
合計	34	100%

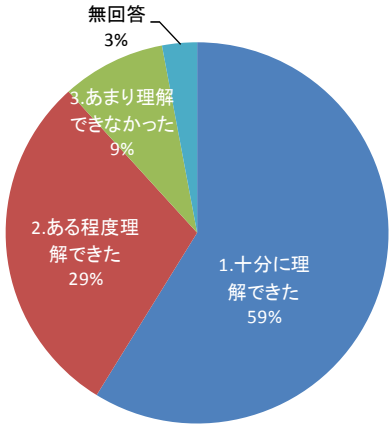
問2　発表「マカオの観光について」について、十分ご理解いただけましたか。



問 3　発表「私が見たラスベガス」について、十分ご理解いただけましたか。

1.十分に理解できた	20	59%
2.ある程度理解できた	10	29%
3.あまり理解できなかった	3	9%
4.ほとんど理解できなかった	0	0%
無回答	1	3%
合計	34	100%

問3　発表「私が見たラスベガス」について、十分ご理解いただけましたか。

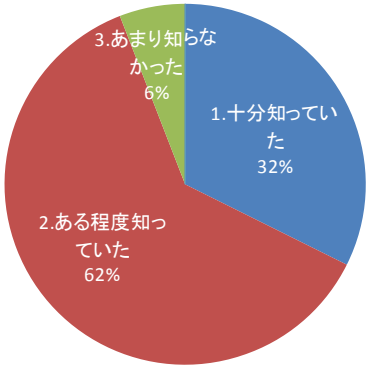


（問 4　セミナーの内容について、どのような感想をもたれましたか。）
※問 4 については、p137 以降に掲載

問 5　統合リゾートについてどういうものか知っていましたか。

1.十分知っていた	11	32%
2.ある程度知っていた	21	62%
3.あまり知らなかった	2	6%
4.ほとんど知らなかった	0	0%
無回答	0	0%
合計	34	100%

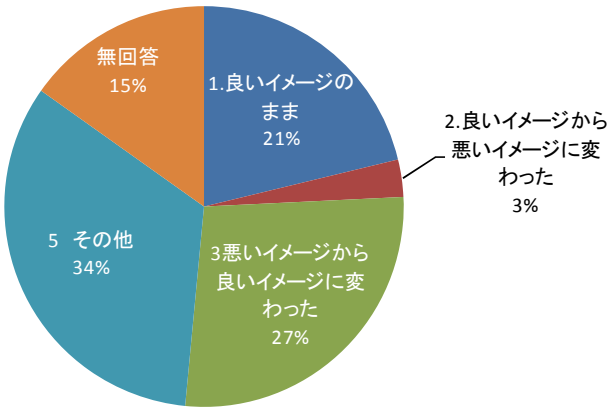
問5　統合リゾートについてどういうものか知っていましたか。



問 6　統合リゾートについてどのようなイメージをもたれましたか。

1.良いイメージのまま	7	21%
2.良いイメージから悪いイメージに変わった	1	3%
3 悪いイメージから良いイメージに変わった	9	27%
4.悪いイメージのまま	0	0%
5　その他	11	33%
無回答	5	15%
合計	33	100%

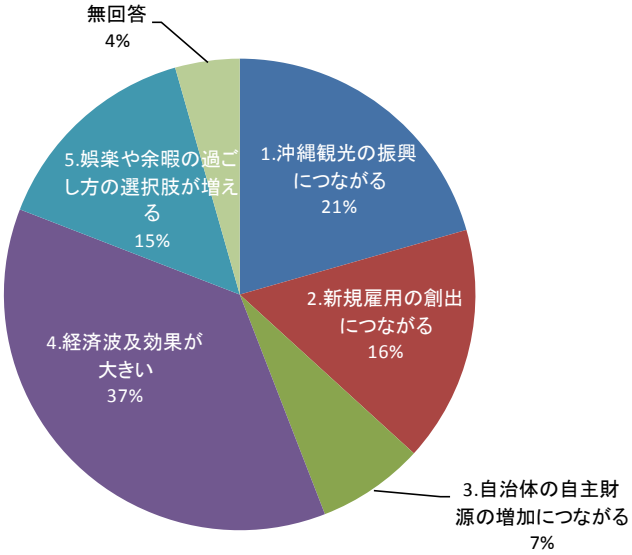
問6　統合リゾートについてどのようなイメージをもたれましたか。



問 7　統合リゾートを県内に導入した場合のメリットは何だとお考えですか。下記から最大 2 つまでお選びください。

1.沖縄観光の振興につながる	14	21%
2.新規雇用の創出につながる	11	16%
3.自治体の自主財源の増加につながる	5	7%
4.経済波及効果が大きい	25	37%
5.娯楽や余暇の過ごし方の選択肢が増える	10	15%
6.メリットはない	0	0%
7.分からない	0	0%
8.その他	0	0%
無回答	3	4%
合計	68	100%

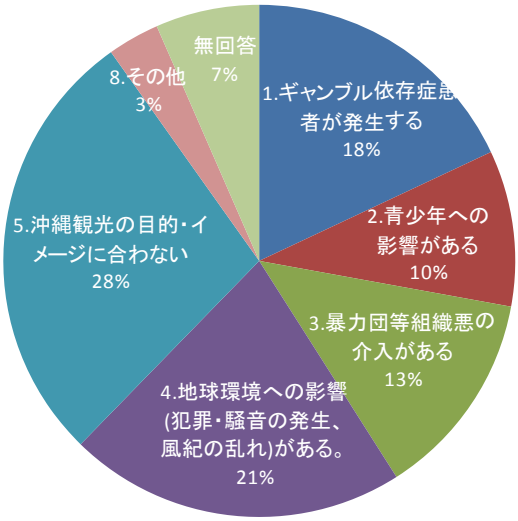
問7　統合リゾートを県内に導入した場合 のメリットは何だとお考えですか。最大2つまでお選びください。



問 8　統合リゾートを県内に導入した場合のデメリットは何だとお考えですか。下記から最大 2 つまでお選びください。

1.ギャンブル依存症患者が発生する	11	18%
2.青少年への影響がある	6	10%
3.暴力団等組織悪の介入がある	8	13%
4.地球環境への影響(犯罪・騒音の発生、風紀の乱れ)がある。	13	21%
5.沖縄観光の目的・イメージに合わない	17	28%
6.デメリットはない	0	0%
7.分からない	0	0%
8.その他	2	3%
無回答	4	7%
合計	61	100%

問8　統合リゾートを県内に導入した場合のデメリットは何だとお考えですか。
最大2つまでお選びください。



問４　セミナーの内容について、どのような感想をもたれましたか。
学生が少ないイメージがあった(会場内)。学生のプレゼンを聞いてどの様に IR 構想に活かすのですか？ラスベガスだけではなく、シンガポールの話も聞きたかったです。
学生の発想が新鮮で面白かった。カジノの導入は「沖縄」全体のイメージや地域に住む他業種の方々との関わりが必要になってくると感じた。また雇用について多言語対応できる人材も必要なのでは。
意見交換の場では様々な方の意見を聞くことができ、改めて IR 導入についてだけではなく沖縄観光全体として視野を広げて捉え考えることが必要だと感じました。
専門的な意見から学生の率直な意見まで幅広い話を聞くことができ、とても意義深い内容でした。ただ、やはり学生が少ないことが残念です。
これからの沖縄の発展に関わるものとして本当に真剣に考えていかなければならないと思いました。まだまだ他人事というか関心を持っていない人が多いと思うので、一人一人が意識していくべきだと思いました。
海外の IR 事業の報告を聞くことによって沖縄で見えてくることがあると思うので、沖縄への導入構想進展につながると思いました。
とても面白いと思いました。また次の機会もあって欲しいと思いました。もっと学生を参加させてやって欲しいと思いました。
学生の発表が非常に良かった。
様々な立場からの視点を取り入れたプレゼンを見ることができたので大変興味深かったです。
今回のセミナーで IR について多方面からの意見が聞けて経済面だけではなく教育の面からも話を聞けたので良かったです。
平良様もおっしゃっていたように“観光に直接携わる人”達だけではなく、全てをつなげていくことで理解、浸透ができると感じました。
今まで自分で考え得なかった事実やアイデアを聞くことができてすごく良かったです。目からウロコ満載の内容ですごくよかったと思います。大満足です。
学生の皆さんのプレゼンテーションが素晴らしかった。
IR の周知に有益だと思います。
学生を交えたことがすごく良かったと思う。
若者の意見を直接聞くことができ有意義でした。
学生の視点から見た沖縄の可能性について意見が聞けてよかった。我々社会人で議論するのではなく将来を担う学生たちの意見に耳を傾ける様な場を今後も作って欲しい。
マカオの現状と沖縄県の観光の現状を照らし合わせて考えていてとても良かった。カジノに対して悪いイメージしかなかったけれども、今日のプレゼンで船上カジノなどテーマパークの様なイメージとして良いイメージとして感じられた。

問９　世界水準の観光リゾート地の形成を目指す沖縄にとって、統合リゾートは有効だと思いますか。
沖縄の目指す世界水準の観光リゾート地をはっきりさせる必要があると思います。セミナー内でも話にありましたが、このことが一番難しいのではないかなと思います。
有効だと思います。
有効ではあるが、一度カジノを入れたら完全に取り払うことはできない。反対ではないが沖縄に IR を入れるタイミングはどうなのか？入れるのであれば必ず成功できるようにしたい。　マカオも世界遺産を活性化させようという動きがある。
私たちの意見では沖縄に IR は合わないと考えています。ですがリピーターが 70%を超える沖縄に新たな観光客を呼び込むには新たな目玉が必要かと考えます。沖縄のイメージにあう現在の沖縄を壊さない IR の導入が必要だと思いました。
まだ分かりません。ただ目標として、チーム沖縄として全ての人々が一丸となって進んでいくことが必要だと思います。変えていくべきもの、変えてはいけないものを分別し、沖縄が同じベクトルで世界に発信していくことが大事だと思います。
統合リゾートがあることをきっかけに、ビギナーのお客様を沖縄呼び込める材料になると思う。
介入の仕方によると思います。今ある観光資源を活かすことが先ではないでしょうか。
有効ではあると思いますが他県にも統合リゾートが導入された場合飛行機などを使わなければ来れない沖縄は不利であり、そこまで大きな利益は見込めない気がします。
有効だと思いますが、入れ方や規模などまだまだ検討する必要があると思いました。
IR 導入の検討は必要だと思いますが、平田さんがおっしゃった様に決めるのは県民。世界の動きによって今とまた半年後では必要性が変わってくると思う。沖縄全体のイメージ、ブランドづくりの中でカジノを位置づけるのか文化観光スポーツはどう位置づけるのかは興味があります。
県が論点を具体的に示すことになった時にまた改めて考えたい。
きちんと懸念要素への対策を固めれば有効だと思います。
私が思うのは、沖縄の本当の魅力というものを活かして、それに沿って IR などの計画を進めていけるのであれば可能性はあるのではないかと思います。
IR 導入するにしても、しないにしても今ある沖縄のイメージは絶対になくしてはならないので、やはり工夫のしようだと思う。
有効であるとは思うが、まずは沖縄の既存の観光資源をどうしていくかと考えます。
あまり思いません。沖縄のイメージがよりリゾートへ傾き現実とのギャップがより大きくなるのではと思いました。また IR により沖縄の観光地が埋もれてしまうと思いました。
有効だと思います。人を惹きつける装置として。
まずリゾート運営に長けた外国人経営者、資本が入ってきます。私たちウチナーンチュハワイの“サモア人”の様に「原住民」と呼ばれる日が来るのでしょうか。
有効だとは思わない。上記で IR のイメージが悪いイメージから良いイメージに変わったと言いましたが、やはりカジノのイメージと沖縄のイメージはマッチしないと思う。ベガス（他は知らないが）は元々砂漠の土地で観光資源が無かったのでカジノ形成をして新しい観光地を創り出したのであって沖縄にはある。沖縄には多くの人を魅了する文化や食、人、自然が存在している。既に存在している観光資源の保存やこれからの進展を皆で話し合う前に IR 導入について話し合うことは、私は逃げの姿勢であると考える。ないものに目を向けるのではなく、自分たちが持っているものをどうするかを考えるべきだ。
統合リゾートの前に、今の観光リゾートを世界水準にするために何が必要かを考えてから IR を導入すべきか考えるべきである。

きちっとした規制を作ればすごく有効だと思う。
有効だと思われるが空港拡張など受け皿の面で多くの課題を抱えているため、それらの課題をクリアーすることが先決。
経済効果の即効性においては有効だと思う。長期的な関係でみるとあまり魅力ではない。（経済効果以外での影響）時間をかけて判断しても良いと思う。（既にアジアにおいては後発国だし）
新しい観光資源としての統合リゾートはとても良いと思った。沖縄の観光発展のためには新しい施設（カジノ etc）も必要だと思う。

問１０　その他、ご意見をご自由にご記入下さい。
本日はとても色々なお話をうかがうことができ、私自身ものすごく勉強となりました、お招きいただきありがとうございます。
沖縄の既存の観光地は正直一度行ったら満足。リピーターも観光地を回る人は少ないと思う。ハワイのポリネシアンカルチャーセンターの様な“体験型”“何回でも行きたくなる”“1 日いてもあきない”エンターテイメントをつくるのもアリだと思う。既存の観光地を改善、景観の整備（首里城周辺だけではなく）、モノレールだけじゃなく交通機関を便利にする。そういう手元の部分から取り組むことも必要。
IR について深く考える機会をくださりありがとうございました。
沖縄県民の人にもっと IR について知ってもらいたいと思いました。知らないこと、無知なことが一番怖いことだと思います。学校でも発表してもっとたくさんの人に知ってもらいたいです。
たくさんの方々からとても貴重なお話が聞けたので良かったです。
皆さんがおっしゃってたように、まだまだ一部のみの議論で県民皆で考えるところまで達していないと思うので、若者事務局のように IR 構想に若者が関わることはできないのでしょうか？　今は別々に調査しているので連携したら県民も身近な問題として考えてくれそうな気がします。
モータースポーツは良い考えだと思いました。開始時間をもう少しずらして欲しいです。
どうか本当に沖縄県民が幸せになる方法を検討してください。
同じアンケートを沖縄県内の学生へ 1000 人規模で行って、IR の理解度を調査した方が良いのではないでしょうか。
上地ゼミのプレゼンはとても良いと思った。上地ゼミのプレゼンを見習ってプレゼンの勉強をしたい。

（５）セミナー写真

２．シンポジウム開催内容について

（１）開催の趣旨と目的

沖縄県では、沖縄観光の課題解決策の一つとして、海外において多くの導入事例がみられるカジノを含む「統合リゾート(IR)」について、本県に導入した場合のモデルやその経済波及効果、課題や対応策などについて、様々な視点から検討している。

今回のシンポジウムは、「沖縄統合リゾートの可能性と課題」と題し、統合リゾート開発に対する考え方やカジノ導入に伴う懸念事項のひとつとされているギャンブル依存問題の現状等について、カジノ運営事業者やギャンブリング関連問題の研究者及び県内の観光事業者等、現場の視点から意見交換を行い、県内に統合リゾートを導入する場合の諸課題に対する議論を深めることを目的として開催する。

（２）開催概要

1）開催概要

①日　　時：平成25年2月6日（水）　14：00～17：00

②場　　所：沖縄コンベンションセンター　会議棟　A1

③開催プログラム概要

１．沖縄県事業報告

２．基調講演Ⅰ

「Alegría, España@Okinawa　～スペインでの観光開発事業経験から見る沖縄での海洋リゾートの可能性～」

講　師　ミゲル　オルティス － カニャバテ　氏　　ネルビオングループ　会長兼 CEO

（スペイン語通訳：大滝節子）

３．基調講演Ⅱ

「日本におけるギャンブリング問題について」

講　師　　西村　直之　氏　　NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク　代表理事

休憩

４．パネルディスカッション「現場の視点からみた統合リゾートの可能性と課題」

ファシリテータ：　栗田　朗　氏　株式会社博報堂カジノ・エンタテインメントプロジェクト　代表

パネリスト：

ミゲル　オルティス－カニャバテ　氏	ネルビオングループ　会長兼 CEO
西村　直之　氏	NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク　代表理事
白石　武博　氏	株式会社カヌチャベイリゾート　代表取締役社長
根路銘　安隆　氏	沖縄経済同友会　常任幹事

2）出演者プロフィール

ネルビオングループ会長兼 CEO　ミゲル　オルティス － カニャバテ　氏

1960 年スペイン・マドリッド生まれ。　マドリッド　コンプルテンセ大学（UCM）法学部卒。大学在学中からバヤドリッド銀行などで法律実務を研鑽し、その後、父親の国際法律事務所にて 1986 年まで弁護士業務に従事。　また、スペイン・日本間の貿易、投資仲介や、

カナダ企業のスペイン総代理店等々、国際的に幅広い分野での事業開発に携わる。

カジノ及び競馬事業については、1990 年央に参入し、2000 年以降スペインで本格化させ、現在は以下の施設運営企業の会長兼 CEO（最高経営責任者）として経営に従事。スペイン・カジノ協会経営者評議会役員。

1994 年　グラン・カジノ・ネルビオン（ビルバオ）
2001 年　ヌエボ・グラン・カジノ・デ・クルサール（サン・セバスチャン）
2004 年　カジノ・デ・マヨルカ（マヨルカ）
2006 年　サン・セバスチャン競馬場の経営
2007 年　グランカジノ・デ・セウタ（セウタ）

国外カジノ事業としては、チリにおいて 2005 年から 2009 年までカジノ＆ホテル、シアター、レストランなどを含む統合リゾート（IR）の共同開発、経営を行った経緯がある。

スペイン・ネルビオングループ概要

ネルビオングループは、スペインの観光、エンターテイメント、カジノ・ゲーム業界に おいて長く、成功実績を持つ企業グループ。
1994 年にスペイン北部の都市、ビルバオにカジノ・ビルバオを展開したことにはじまり、ビルバオ市の工業都市から観光都市への変遷過程において様々な形で関わってきた。
その後、スペインにおいて歴史的伝統のあるサン・セバスチャンのカジノ、ヨーロッパ観光で最大の観光客を集める地域のひとつである、マヨルカ島に位置する、パルマ・デ・マヨルカのカジノの所有権及び経営権を取得、セウタのカジノを取得。
また、2016 年には 100 周年を迎える、サン・セバスチャンの競馬場の経営もしている。

NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク　代表理事　西村　直之（にしむら　なおゆき）氏

精神科医、日本精神学会認定専門家医。1990 年琉球大学医学部卒業。1995 年琉球大学大学院修了（医学博士取得）。国立肥前療養所（アルコール・薬物依存病棟）を経て、平成 11 年より（医）卯の会あらかきクリニック院長就任。2006 年４月よりパチンコ依存問題相談機関リカバリーサポート・ネットワークを立ち上げ代表を務める（2009 年 10 月リカバリーサポート・ネットワークのＮＰＯ法人化に伴い、代表理事に就任）。ダルクやワンデーポートの支援などを長期的にわたり行っている。1998～2002 年厚生労働省班研究の研究員（薬物依存）。龍谷大学矯正・保護総合センター研究員。2007 年～厚生労働省班研究の研究員（いわゆるギャンブル依存）。

株式会社博報堂カジノ・エンタテインメントプロジェクト　代表　栗田　朗（くりた　あきら）氏

1959 年生まれ。1983 年（株）博報堂入社。1985 年国際科学技術博覧会（科学万博～つくば’85）いばらきパビリオン・くるま館、1989 年横浜博覧会（ＹＥＳ’８９）開港記念村、1994 年 JAPAN EXPO 世界リゾート博紀陽銀行館、1997 年大阪食博覧会関西電力パビリオン・大阪ガスパビリオン、1999 年南紀熊野体験博テーマ館、2000 年ジャパンフローラ 2000 淡路花博検討委員会委員ほか主要博覧会プロデューサーを歴任。同時に空間プロデューサーとして商業施設開発、リゾート開発、美術館・記念館・ショールームのプロデュースに従事

するほか世界各国のモーターショーをはじめとしたコンベンション・エキジビションビジネスの開発に参画。2002 年よりメディアコンテンツプロデューサーとしてメディアコンテンツ、ライブエンターテインメントコンテンツの事業開発に取り組む。2003 年カジノ・エンタテインメントプロジェクトを設置して現職。早稲田大学総合研究機構アミューズメント総合研究所客員研究員。（社）日本プロジェクト産業協議会都市型複合観光事業研究会委員。（社）日本イベント産業振興協会イベント業務管理士１級。

株式会社カヌチャベイリゾート　代表取締役社長　白石　武博（しらいし　たけひろ）氏

1962 年生まれ。沖縄県出身。早稲田大学卒業後、㈱沖縄銀行へ就職。その後ハワイパシフィック大学で専門的に観光を学ぶ。2000 年㈱ホット沖縄　代表取締役社長就任。2005 年ニッポンレンタカー沖縄㈱、㈱カヌチャベイリゾート、㈲ファーティル　代表取締役社長に就任。2006 年以降は沖縄県レンタカー協会会長、沖縄バスケットボール㈱（ｂｊリーグ:琉球ゴールデンキングス）取締役、沖縄観光の未来を考える会副理事、NPO 法人ナハ・シー・パラダイス協議会理事長、㈶沖縄観光コンベンションビューロー理事、沖縄県 EV 普及促進協議会会長などを務め、沖縄における観光産業の継続的発展を図る活動に取り組んでいる。

沖縄経済同友会　常任幹事　根路銘　安隆（ねろめ　やすたか）氏

1948 年生まれ。琉球大学 法文学部 法政学科卒業後、琉球政府 通商産業局入局。1972 年 沖縄の復帰に伴い、沖縄開発庁 沖縄総合事務局 通商産業部に所属。

内閣府 沖縄総合事務局 経済産業部 地域経済課長等として地域経済の振興、地域産業活性化に携わる。その後、沖縄電気保安協会専務理事を経て、2012 年４月から一般財団法人 南西地域産業活性化センター専務理事に就任。同年４月に沖縄経済同友会 常任幹事に就任する。

３）開催会場

沖縄コンベンションセンター　会議棟　Ａ１

【施設図】

（３）議事録

基調講演Ⅰ
「Alegria, Espana@Okinawa　～スペインでの観光開発事業経験から見る沖縄での海洋リゾートの可能性～」

ネルビオングループ会長兼 CEO　ミゲル　オルティス － カニャバテ　氏

今日は皆さんの前でお話出来て嬉しいです。今回は非常に重要な統合リゾートシンポジウムに、講演者としてお招き頂いた事に、沖縄県の方に心から感謝したいと思います。私は今日のリゾートシンポジウムが、沖縄県の観光開発にとって非常に画期的な、ビフォーアフターとして語られるような講演会になると確信しています。お招きして頂いた沖縄の方の期待を裏切らないような講演が出来るように頑張りたいと思います。

私はネルビオングループの会長兼 CEO として長くこの世界に携わってきましたので、私の今までの経験を基にお話させて頂きたいと思います。皆様様々な意見をお持ちだと思いますが、私も私なりの意見を熱烈に弁護したいと思います。

～ネルビオングループの事業説明～

最初に、私たちネルビオングループが目指しているのは、人々になるべく健全な形で楽しんでもらえる施設を提供するという事です。カジノに対しては、ご指摘のようにそれが害を及ぼすのではないかという懸念を持たれがちですが、私たちはそれを払拭するように努力してきました。我々がスペインで運営している４箇所のカジノのいくつかは、カジノ施設を付帯する IR 型（統合リゾート型）と言えるものです。その他にも競馬場を経営し、オンラインゲーミングやオンラインギャンブル､オンラインベティングのライセンスも取得しました。

スペインには現在 40 箇所のカジノが存在していますが、我々が運営する４箇所のカジノのうち、サンセバスティアンとマジョルカにある２箇所が３５年という一番長い歴史を誇っています。２つは各々特徴があり、サンセバスティアンのカジノはフランコの独裁政権が終了した直後に再開され、カジノが伝統的に行われてきた町で、IR 型のカジノとは違います。一方マジョルカにはカジノという伝統はなく、そこに観光という魅力を付け加えるという、統合型観光開発の一貫としてのカジノになっています。おそらく、マジョルカのカジノが、スペインでは唯一の IR 型のカジノで、面積は 50,000 ㎡の敷地にあり、建家面積は 5,000 坪になります。また、海に面しており、ビーチクラブ等のスポーツ複合施設、レストラン、プール、リラクゼーション施設、宴会場、会議施設等もあります。我々が運営する４箇所のカジノは IR 型であってもなくても、お客様に楽しんで頂けるような施設であって、カジノだけではないというのも特徴です。ですから、様々な文化行事、社会行事等健全に集える場所を提供するという意味で、カジノを経営しています。また、ビルバオのカジノの場合は上層部がホテルとなっており、カジノのみで 6,000 ㎡、ホテルを合わせると 12,500 ㎡の建家となっています。レストランも２つあり、トーナメント可能な場所や、スポーツくじを行う場所もあります。また、月２回主にオペラによる生演奏が行われており、お客様に楽しんでもらっています。

私たちのカジノでは世界的なポーカーのトーナメントも行われており、世界中から参加者が集っています。99 年には日本人のグループのパフォーマンスも行われました。また、ワインのテイスティング、ファッションショー、本の見本市等文化的なイベントも行われ、様々なエンターテインメントが定期的に行われています。その中においても、ジョアン・ミロのオリジナル 54 点の展覧会を最初に行い、その後も巡回展として各地で展示されるようになった事を誇りに思っています。私たちはカジノ経営を通して、社会的に溶け込んだ形で活動を展開しています。

サンセバスティアンはスペイン王室他、欧州の様々な王室の方々が夏の休暇を過ごす場所として、ハイソサエティ、ハイレベルな観光地として有名な所です。人口の比率に対し、ミシュランの三ツ星レストランの数が多い事もあり、バスク料理の専門協会が作られ、落成式には皇太子もいらっしゃいました。また、私たちはそのセンターのスポンサーも努めております。サンセバスティアンはバスク州にあります。バスク州というのはスペインの他の州に比べて、非常に特異な文化を持っており、社会的な特殊な要因を考えて、バスクで非常に盛んなスポーツのスポンサーとなり、チームを持っています。

チリのコピアポ等、経済的に合理性に欠けるプロジェクトと言われていたところが、IR 型として成功する等、私たちの観光開発により観光客が多く訪れるようになりました。ダカールラリー開催の際に３日間同じ場所に滞在するというのはコピアポだけで、それだけ魅力ある場所になったのだと思います。以上がネルビオングループの事業の説明でした。

～沖縄における統合リゾートについて～

今回のシンポジウムは、一般の方にプレゼンする初めての機会であると認識しています。以前から何度も沖縄を訪れていますが、一般の方は IR 型に対して疑心暗鬼、不安感を抱いていると感じますが、私の話を聞く事により、少しでも変化があると良いと思っています。

多くの方が沖縄の将来の発展を考え上で、観光が非常に重要な要素になると考えておられると思います。具体的にどのような観光かという事が重要になってきますが、品質の良い観光を目指すべきです。

観光開発にはエコ、文化、ショッピング、アドベンチャースポーツ、グルメ、夜のエンターテインメント等、各々を中心とした様々なものがありますが、全ての素材を活かすべきだと思います。少しでも沖縄について認識のある私からすると、沖縄にはそれら全ての要素を活用出来るチャンスがあると考えています。もし、足りない部分があるとすれば、エンターテインメントや夜の娯楽、外国語教育等があり、特に英会話が出来るようになると良いと思います。また、外洋船が寄港出来るように大きな港を整備する必要もあります。そうすると、海外からの富裕層のお客様が利用出来る大型のショッピングモールも必要になるでしょう。これらの施設に関しては県の政策のバックアップがあれば、後付けでも可能であると思いますが、それだけでは解決出来ない重要なものとして、安全性があり、沖縄はそれを持ち合わせています。その他、衛生的な街であり、十分な医療施設が整っている事も重要な要素になると思いますが、最も重要なのは沖縄の人の陽気で開放的な気質、またホスピタリティの高さだと思います。これらはスペインと共通しており、スペインが 60～70 年代に、観光立国として成功した要因であると考えます。

外国人観光客の平均滞在日数は 9.2 日で、6,000 万人程が訪れているので、延べ５億４千

万日滞在する事になりますが、日本では、100 万人程度、平均３日間の滞在日数で、延べ２千４百万日となり、スペインと比べると 20 倍もの差があります。

質の高い観光開発を目指して頂きたい。その上で重要なのが、沖縄の方の明るい性格と、戦略的立地ということです。現在沖縄は、世界経済の成長の中心にあるということも考えて頂きたいと思います。高い成長率を誇っている韓国、中国、ベトナム、フィリピン、シンガポール、マレーシアに非常に近い立地です。そこからの観光客を誘致出来るのではないでしょうか。

私たちネルビオングループと致しましては、長い観光開発の経験と成功例で、沖縄のカジノを付帯させた IR 型観光開発に参加して行きたいという願いがあります。スペインが陽気な気質で観光開発に成功したように、沖縄もその明るい気質を出発点として、将来の観光開発が必ず成功出来ると思っています。ご静聴ありがとうございました。

基調講演Ⅱ
「日本におけるギャンブリング問題について」
特定非営利活動法人リカバリーサポート・ネットワーク　代表理事　西村　直之　氏

今ご紹介に預かりました西村です。リカバリーサポート・ネットワークとご紹介頂きましたが、本業は医者です。日本で唯一、パチンコ問題を相談する電話相談機関を、沖縄県の西原町に 2006 年に立ち上げました。開設以来、全国から 8,000 件受け付けており、現在は業界の取組もあって、月 200～300 件の相談を受けております。相談料は無料ですが、通話料は相談者の負担となっております。活動は、パチンコ・パチスロ産業の大手 14 団体から年間約 3,000 万円の資金援助や、会費、寄付等で運営しております。今年１月には認定ＮＰＯ法人の仮認定を頂いております。沖縄県にありますが、全国を対象としているという事で、県内にはあまり知られていません。

～日本におけるギャンブリング問題の捉え方～

日本でギャンブリング問題と考えた時に、ギャンブル依存症の定義がわからないという問題がありました。なぜならば、日本にはギャンブルという言葉の定義がないのです。世界においてもそうです。ギャンブルではなくギャンブリングとしたのは非常に重要で、諸外国では、賭け事は、その種類ではなくお金や物を賭ける事をギャンブリング、いわゆる「賭け事」としており、ギャンブルという特定の行為があるわけではありません。沖縄の闘牛を例にすると、観戦するだけではギャンブルになりませんが、お金を賭ける人にとっては博打になります。その差を表現する時に、エンターテインメントの視点から見ると、ギャンブリングという表現をしないと、定義が曖昧で言葉だけが一人歩きしてしまいます。本来ギャンブリングという言い方をした場合は、ゲームと同じ言い方になりますが、ゲームの中でもお金や有償な物等を賭けている場合のみギャンブリング、またはギャンブルと言われています。

本来ギャンブリングの概念には違法、合法は関係ありません。しかし、定義が曖昧な為、言葉だけが一人歩きして、不安をあおってしまっています。私は、厚生労働省のギャンブリング関係の研究班に入っていますが、その中で提案してギャンブル依存症という言葉は使わ

ないという方針にして頂きました。

日本ではギャンブリングに対する国内法上の解釈の問題が非常に大きく、日本ではギャンブル＝賭博＝博打となっており、博打は非合法なので、ギャンブルでない事を行政機関は証明する必要があり、「公営ギャンブルはギャンブルでない」「パチンコは遊戯で賭博ではなく、法律上も問題ない」としています。その上で、ギャンブル＝賭博＝違法という事で、違法な事に関しての救済や研究が一向に進んでいませんでした。そして、特にギャンブルの問題が起こった時に、これはギャンブルではないので、私たちは特に調査も責任も持たなくていいというのが、監督官庁が今まで取ってきたスタンスでした。その結果日本では、パチンコや公営ギャンブルについての統一した見解というものがなく、一番の問題はギャンブルが賭博と同一される事です。ギャンブルの提供者は犯罪者であり、それにハマってしまう人は落伍した人、又は、犯罪者になりかねないという偏見により、この問題が議論されて来なかったのが、日本の中での大きな問題になります。そういった背景もあり、問題評価の基礎となる疫学的な調査データがありません。

日本におけるギャンブリング問題は何かという時に、悲しい事にそれを評価するデータが存在しないのが現状です。これは、法律上の監督官庁が様々で、金銭問題以外には表面化しにくいという事にもよります。

これまで、誰がどのような目的で調査をするのかという事が明確にされてこなかったのですが、今年からパチンコ問題に関して、全国的な疫学調査が開始される事になり、私もそのメンバーに入っております。数年ではその基礎データが出せると思います。

現在、日本のギャンブリング問題の現状把握は、レジャー白書、債務関連問題の統計、自殺対策関連統計等から推測しながら拾っているに過ぎないものです。調査票に関しても海外のものを参考にしたもので、日本の現状に適しているかという議論すらされておらず、一部の研究者が、ギャンブル依存症の現状はこうだという言葉だけを先行させた粗悪な学術議論がなされ、現実が浮かび上がってきていないのが非常に大きな問題です。その為、研究の裾野や質的なものが上がってきていません。

大前提として、娯楽市場は縮小、多様化しており、遊戯というのは直接参加型より、オンライン参加型に世界市場は変わってきています。世界ではどのような施設を作るかというよりも、どのようなサービスをワールドワイドに広げるかという時代に来ており、アメリカにおいても大統領選で、オンラインゲーミングの認可の有無が大きな議題となっていました。カジノ認可の有無については一つの時代が終わっており、世界的には賭博型金銭消費型ギャンブリングから、ゲーム型時間型オンライン参加型に移行しつつあり、参加者は多様な遊びを自由にやっていく形に変わりつつあります。日本では少子高齢化が進んでおり、経済成長が終息しているので、ギャンブリングの参加者は年々減少し、高齢化が進んでいます。特に20～30 代の若者で減少しており、高齢者のヘビーユーザー化が問題になっています。沖縄県に関しても、子どもが多いということで、人口の減少が緩やかでありながらも、少子高齢化は進んでおり、ギャンブリングの形が刻々と変化している事を周知して頂きたいと思います。

ギャンブリング問題というのは、母数が減れば時間と共にある程度は終息していきます。電話相談をしているとその数値ははっきりと出てきます。沖縄県においては、公営ギャンブルもなく、パチンコ、スロットで問題を持っている方はいても、参加率というのは全国でも

最下位となっています。しかし、ゲームセンターへの参加率は全国平均よりも高く、宝くじやサッカーくじを購入する率も高いものになっており、地域性やサッカー人気等により、娯楽が多様化し、変動している段階にあります。また、私が活動していて沖縄県内で受けてきた印象ではありますが、高齢者のスロットマシンへの参加率が非常に高いという特徴があり、金銭問題が生じやすいのですが、表に出にくいという事があります。しかし、一方で沖縄では、ギャンブリングに参加する人としない人での意識に大きな差があり、参加している人に対して非常にマイナスの印象があります。これは鉄道がない為、あえて行く必要がないと感じている事もあるかもしれません。

ギャンブルをする人にも色んなタイプがあり、例えばオーストラリアの研究者による分け方では、アクションギャンブラーという、危険によるスリルや興奮を求めるタイプは、人に勝つ事が大好きで、カードゲームやルーレット、株、証券等の勝ち負けがはっきりする大きな物が動く事を好む傾向があります。IR 型ではない昔ながらのカジノでは特にそういう方が見られます。一方、日本でほとんど問題になっているのが、エスケープギャンブラーという、逃避型のギャンブラーで、問題逃避し、人との葛藤を避ける為、機械相手に時間とお金を消費するタイプです。人との勝負を好まない、マシンやオンラインゲームを好む傾向にあります。

カジノが出来る事により、問題が増える、ギャンブラーが増えるといってもそのタイプは様々です。どのタイプがどのように動くかという事はサブタイプで違ってくるので、色んなサブタイプを認識する必要があります。

私の考え方としては、ゲーム型のギャンブリングと賭博型のギャンブリングがあって、ギャンブルが賭博なのではなく、非日常で大金を使うという賭博型のギャンブリングを好むタイプと、日常の中で暇つぶしをしながら、少しお金が儲かれば良いというゲーム型のギャンブリングを好むタイプ、又はそれらの中間のタイプがあり、演出の仕方でギャンブリングに関わる人が違ってくると思います。

～ギャンブリング問題の対策について～

カジノやパチンコにより、問題が増えるのかという事は、調査されていない為はっきりしておらず、増えただろうという推測でしかありません。しかし、何故それが社会問題となるのかというと、今まで対策がなかったからです。対策機関としては、行政、民間、公的なプロバイダー等あると思いますが、そこで調査、予防、啓発、介入、支援のプログラムの開発・提供、また提供する社会資源の育成をして、それをまた評価して機能的に動かせるようにし、問題を持った当事者やその家族に対し、生活の再建問題解決、問題行動の修正、問題の再燃防止等、家族やその周辺の人たちのサポートをする等のサービスを常に提供出来る体制を、ギャンブリングを提供する側が取っていれば、問題が起こる率はかなり大きく変わってくると思います。

対策がなかった為に起こってきた問題という事で、どの程度のギャンブリングの施設で、どのくらいの問題が起きるかということは単純には言えません。このような問題をあらかじめどのように設定していくかという事が非常に大事になってくると思います。

カナダのカルガリー大学の方が作られた、パブリックユースステップドゥケアモデルというものがあります。問題又は病的ギャンブラーに対して、公衆衛生の問題として、どのよう

に介入していくかという一つのデザインになっています。問題がある人への意識付けの方法等、介入を行いその人達の状況やニーズにより、多層的で連続的な支援をするシステムで、ギャンブリングの有無ではなく、問題がある人達に対しての連続的な対応方法のモデルになっています。オーストラリアやニュージーランドでも、政府の対策に一つのモデルとして提示されていて、私も良いモデルであると思います。

日本の現状を考えると、公的な専門援助機関はなく、医療保険上、病気として扱うのかという事すら議論が定まっていません。

現在、専門性を持った民間回復施設としては、横浜のワンデーポートという施設等、全国に数箇所ありますが、専門相談機関としては、民間で私たち一箇所だけとなっています。当事者活動についてはだいぶ増えて、46 都道府県にあり、ミーティングルームは 136 箇所、家族の集まりというのは 114 箇所、その他ソーシャルネットワークサービスを使った民間の支援活動もだいぶ広がっています。オンライン化により、リアルな支援の他にもオンライン上の支援というのも大事になってきています。支援の方法は多様化し進んでいるのですが、現状追いついておらず、日本はスタートにも立てていない状況です。

パネルディスカッション

「現場の視点からみた統合リゾートの可能性と課題」

ファシリテータ≫　栗田　朗　氏　㈱博報堂カジノ・エンタテインメントプロジェクト代表

パネラー≫

〇ネルビオングループ会長兼 CEO　ミゲル　オルティス － カニャバテ　氏

〇特定非利活動法人リカバリーサポート・ネットワーク　代表理事　西村　直之　氏

〇株式会社カヌチャベイリゾート　代表取締役社長　白石　武博　氏

〇沖縄経済同友会　常任幹事　根路銘　安隆　氏

【栗田氏】　株式会社博報堂の栗田でございます。短い時間ですがよろしくお願いします。私は 1999 年から 13 年間ほどカジノを含む統合リゾート（IR）の日本での立法作業のサポートに携わっている。当初は自民党が議連をつくり、その後民主党政権で超党派となり、また自民党に戻り、この超党派での議員立法を立ち上がりの段階から協働の形で携わらせていただいている。今年自民党政権になり IR の議論が急速に動いている。もし今年 IR 推進基本法が上程成案した場合、当初日本全国で２～３か所、最終的に道州制を見据えて１０か所ほどの地域が IR を導入することが可能になる。そういうタイミングがもしかしたら今年来るかもしれない。もし国の刑法が特別立法でカジノを認めた場合にこの沖縄の地域においては IR を活用した観光振興をするのか、カジノを含む IR という形をとらないで別のどのような手法で 21 世紀の沖縄の観光を伸ばしていくのか、そういった意味でこの様な先生方に集まってもらいパネルディスカッションの開催となったと思う。

今日は基本的には３順ほどそれぞれの先生からお話を伺いたい。１順目では「沖縄において IR を導入した場合の可能性について」、２順目では「沖縄に IR を導入した場合の問題点、課題」、最後３順目は「沖縄の観光の将来に対してのご提言」をまとめの形として頂ければ幸いである。

私の方から IR 法に関する国の動きと沖縄県以外の行政の動きを簡単にご報告させていた

だきたいと思う。大方の意見として今年の秋の臨時国会にも IR 推進基本法が法案化されると言われている。もともと IR の議論が立ち上がった際、自民党の今の町村派の安倍先生に近いグループと麻生派が中心となり、これからの日本の国際観光振興のインバウンドを伸ばしていく際に IR が有効で、IR なしでは非常に厳しいのではないかという疑問点からこの様な議論がはじまった。安倍首相は IR 議員連盟の最高顧問である。そうした方々を中心とした安倍・麻生政権。文部科学大臣の下村先生も当初からの IR 議連の設立メンバーである。国の文化と教育を担う文部科学大臣が IR 活用により日本の文化芸術芸能の国際的な振興に強く結びつくという信念により推進されている。そして自民党三役の総務会長に議連初代会長の野田聖子先生がいらっしゃる。

これに呼応した形で地方自治体の動きも１月から非常に活発化している。まず大阪地区の橋下徹市長が大の IR 推進派である。３年前に私がシンガポールにご案内したが、広域関西圏で IR というものを活用すると自分が実現したい政策が実現できると推進を頂いた。今年の１月からは夢洲（ゆめしま）という大阪市が所有する場所を特定して誘致したいとした。安倍首相から維新の会に協力を求められた際に、前提として IR を活用した観光振興政策を強く求められた。さらに今年の６月までに IR 法を出すことを求めると記者発表された。

東京都においても猪瀬新都知事は従来から日本カジノ学会の常務理事で東京を千客万来の都市にするうえでオリンピックと IR の活用で東京を東アジアのハブとして復権したいと言っている。

最初の１順目としまして「沖縄に統合リゾートを導入した場合の可能性」について、オルティスさんからは事業者の立場から具体的なご提言、白石さんからは観光事業者として IR が導入した場合観光事業がどうなるのか、そして西村さんからはギャンブリングの依存に対する取り組みから、IR が導入された場合どのように考えればよいのかこの辺のご提言を頂きたい。根路銘先生からは沖縄の経済界を代表して県全体の経済をけん引する力が IR にあるのかご意見を頂きたい。

【オルティス氏】まず、講演の時に質の高い観光を目指すべきだと言ったが、１人当たりの観光支出を増やしてもらわなければいけないということ。つまり全体的な観光客の数は減るが、１人当たりの支出が増えるので同じ経済効果を期待できる。訪問者が少ないことは自然環境を守ることもできるという事も意味する。

質の高い観光、高い所得、高い購買力を持つ観光客を呼ぶためには様々な観光の魅力が必要になる。エコツーリズム、グルメ観光、夜のエンターテイメント、ショッピングができる観光も必要となる。すべての観光の魅力を備えていないといけない。そこから IR の開発にはカジノが不可欠と考える。

沖縄が国際的な観光地として発展していくためには２つの方法しかない、１つはスペインが過去 30 年かけたように時間をかけて観光開発していくこと。だが同じ時間を今沖縄がかけることはできない。２つ目は１つのトピックを持つこと。例えばマレーシアのペトレナタワーやアラブ首長国連邦のブルジュ・ハリファの様な世界一のタワーを持つ。そしてその中には素晴らしい建築家によるカジノを持つなど画期的なプロジェクトを中に入れることが重要。カジノのことになるとシェフの学校やディーラーの学校が付属の施設としてつくられることになる。ですから沖縄にはこの様な観光開発を行う要素は全てそろっていると思う。先

ほどチリのコピアポの例を紹介したがコピアポより恵まれた条件を備えていると思う。画期的な事業をとり入れた観光開発を行うことによりそれによる付随的な産業活動を進めていくのが道筋だと思う。

【栗田氏】根路銘さんの方から IR の効果についてご意見いただけないでしょうか。

【根路銘氏】本日私は沖縄経済同友会の常任幹事の一人、IR 検討会のチームリーダーという立場で参加させていただいている。本来の所属は南西地域産業活性化センターの専務理事でございます。同友会では多方面にわたって勉強しているが、IR に関しては平成２４年６月に臨時の検討会を立ち上げ勉強を始めた。６月から勉強を始めたが、現在はまだ有識者の皆様のご意見を頂いたり、データを集めている段階で、IR に関して導入に賛成、反対といった結論には至っていない。今回お話しできる話は同友会としてオーソライズされた意見ではなく、勉強の中で出てきた意見を紹介する程度になる。

IR 導入のメリットという事で沖縄県の中でいくつかのパターンを想定して試算をしているという事で 3,000～5,000 億円程度、雇用効果は 30,000 人、多くて 5,4000 人という試算があると伺っている。大変大きな経済効果が見込める事業で、そのメリットを生かしていくためには投資の初期段階だけにとどまらない近隣地域との競合の克服と、どう維持発展できるかが大きな課題だと思う。さらに昨今の国や県の財政状況の厳しさによるインフラ投資の限界を考えると IR によってもたらされる資金の魅力は大変大きいものがあると思う。メリットはそこにあると思う。ほかにも沖縄の観光が海と空だけではない観光の多様化、夜間の観光の魅力の増加、外国人観光客の増加、沖縄の知名度の増加にもプラスに働くと思う。また IR として一体的に開発される施設により県民生活の利便性も大いに向上すると思う。

【栗田氏】続いて白石さん、観光事業者の視点からのお話をお願いします。

【白石氏】IR の導入是非については、現段階で私の個人的意見では 55:45 の割合で、導入した方が良いかなと思う。IR というのはカジノの収益部門で非収益部門をリードできるものをつくり集客力を高めましょうという話になると思う。カジノそのものが収益をリードするものにはならないと思う。先ほどの話で、最終的に全国で８～10 カ所つくるとなると東京、大阪は間違いなく大規模なものが出てくる。カジノの規模だけを考えると中央競馬と地方競馬みたいな話になってしまう。その中での競争力はクエスチョンマークになってしまう。これに対して沖縄の海洋の良さなどを活かして自然をつかって沖縄にしかないもので沖縄に連れてくるために必要な部分が作れるのであればプラスになる。その部分ができていない段階で議論するのではなくメリットが出るように IR の設計をするようにしないといけない。

ポイントは２つありまして、１つ目は３つのプラス、①本当に沖縄県全体が儲かるのか。どこの国からどれだけお客さんが来るのか。②世界には 100 か国以上カジノがある国がある。カジノだけが解決の条件の全てではない。③事業体以外の既存も含めた沖縄の観光をつくってきた部分を壊さずに進めていくにはどうしたらよいか。

以上の３つのプラス（①沖縄全体が儲かる②仕組み自体が儲かる③仕組み以外で儲かる）をどう検討に入れていくかが重要だと思う。

例えばシンガポールは儲かっているから所得税 17%なので大金持ちがたくさんいるという人がいるが、仕組みだと思う。それで社会が維持できるので所得税が低く抑えられる。消費文化が高い人が移り住む、そこで消費が喚起され地域が豊かになる。このカジノだけの議論だけではなくて、これを機にした正の循環の仕組みが成功していると思われるところでは仕組みとして成立している。

もう１つのポイントは、作ることが目的化してはいけないということ。どんな沖縄の観光産業の図をつくるという事を明示したうえで定量化して議論する必要がある。

【栗田氏】西村さんの方からは、IR 導入した場合の可能性においてギャンブリング問題をどのようにとらえていくべきかお話していただけないでしょうか。

【西村氏】私は依存問題に長く携わっています。ここに座った理由は依存問題に長く関わってきて、社会的インフラが最大の抑止効果を持つと考えている。例えば失業率が高ければアルコールと薬物の問題が増えることが分かる。

私が医者をやっている間、薬物には数万人、アルコール中毒は数千人関わったが治せた人はほとんどいない。環境とか状況とか周囲の力を社会資源とつなげる手助けをしたに過ぎない。それがなければ医療の力なんてほとんど役に立たないことを思い知った。

沖縄の状況を考えたときカジノであるかではなく､大きな底上げをするための活動が大切。それが社会病理である依存を変換させていく力になる可能性がある。今まで存在しなかったリスクを負うものを地域に入れるという選択において、新たな病理が発生する危険がある。沖縄県内にどのような問題があって新たなリスクが生まれる前に何をしなければならないか、そういった議論が行われる。これは是非立場を超えて立ち会うべきだと思う。この地域に何が必要なのかを提言しなくてはいけないと思う。儲かるからカジノをつくるという話では無理だと思う。綿密にデザインしていくのであれば日本でも有数のリスクマネジメント、世界に売れるようなプログラムの構築もできると思う。

だからこそカジノだから対策をすればよいという話ではないと思う。むしろ地域の公衆衛生的な話としてどう支えていくかそこの部分に関してはメリットもあり単に問題を大きくするのか他の問題を含めて圧縮していくのか２つが選択肢としてあると思う。

【栗田氏】オルティスさんの方からは、世界に打ち勝つための画期的なランドマーク性のある施設開発が必要というご指摘を受けた。根路銘さんの方からは、この元気のない時代に民間が大きな投資を行うことができる、世界から大きな投資を引っ張ることができるそれが魅力ではないかという指摘を受けた。白石さんの方からはカジノが目的ではない、カジノは非収益部分を支える手段であって沖縄が目指す方向性において効果を発揮する非収益部分は何か、それにカジノが貢献させられるのかが重要。さらには全体の仕組みをつくる設計がありきであるというご指摘を受けた。西村さんの方からは社会インフラを整備することが最大の依存症の抑制につながる。この様なことが IR の可能性として考えるべきで、カジノありきの議論はナンセンスである。

2010 年に IR を導入したシンガポールは大成功したと言われている。導入前に 800 万人であった観光インバウンドを、翌年には 1,300 万人まで飛躍的に伸ばしている。IR だけが成功

したわけではなくて IR の中のホテルの客室稼働率は 99.8%あげており、事実上１日２回転以上している。一方、周辺の稼働率が落ちたかというと 80%程度だった稼働率が国全体の平均で 90%を超えるという形で他の産業への波及も働き、GDP が 25%弱引き上がるという好成績を残している。IR は大きな効果を上げる可能性もある政策でありますが、一方で IR を導入した場合にどのようなリスク・課題が考えられるか２順目ではお話を聞いていきたいと思う。

【白石氏】先ほどの話の裏返しで中途半端なものをつくった失敗事例も当然世界にあり、そういうかたちのものであれば今つくっているものも壊れてしまう。リスク認識はすべき。今沖縄のコアとして持っているもの、それで世界に発信していく、リードしていくものは何だろうという議論をやっている中でこの様な議論はない。全体として沖縄が収益を上げていくというのが観光事業の柱であるので、足し算の議論とともに引き算の議論もしなければならない。例えば修学旅行生は減る、とリスク認識しなければならない。これはマーケットが決めることである。したがってプラスの部分とマイナスの部分を組み立てて沖縄全体が儲かる仕組みと新しいものを生み出す後押しが必要。いま沖縄がよいとおもっている非収益部門に投資ができるのか、やり方によっては同じものがメリット、デメリットにもなると考えています。オルティスさんが言ったランドマークも今からジャッジしていく必要がある。

【栗田氏】根路銘さんからデメリットについてお願いします。

【根路銘氏】効果による光が強ければ、影も濃い。我々の勉強の中で上がってきている意見は、青少年への影響、依存症は言われるが、その他にはカジノにより沖縄観光のイメージがネガティブに変わらないかという心配がある。例えばマカオは 16 世紀の頃にはポルトガルの東洋における拠点であり、日本への鉄砲伝来、キリスト教伝来の中心となった都市であり歴史的にも意義のある都市ではあるが、今はカジノのイメージが強い。例えばマカオに修学旅行に行こうという人はいないと思う。マイナスイメージが沖縄観光について回らないかという心配がある。

既存の観光業者と IR で立地してくる巨大ホテルの利益が相反する可能性が考えられる。IR で立地したホテルが中途半端な集客しかできないという場合、既存の事業者の宿泊客がそちらに流れてしまうと既存の事業者に大きな影響が出てしまう。場所の問題では、IR を中部地区につくった場合、那覇地区、北部地区に影響が出ないだろうかという恐れもある。カジノが設置されているホテルと設置されていないホテルの不公平感も生じないかと思う。３番目に社会インフラの関係だが数百万人の外国人観光客が増えるとなると駐機施設が間に合うか、国際ターミナルが間に合うかという施設の問題。交通インフラの問題。カジノのイメージをマスコミがネガティブイメージでとらえると観光だけでなく健康産業、IT 産業などにネガティブな影響を与えないだろうかという事を心配として考えられる。

【栗田氏】西村さんの方からはギャンブリング依存の専門家の観点から課題と対処の方法論をお願いします。

【西村氏】カジノといっても漠然とした不安材料である。ギャンブルの問題が増えるという報告、変わらないという報告もある。これはどのような形態をとるかにより地域への影響が異なるという事である。地域の人が入場できる施設にするかしないのか、規模が大きいのか小さいのか、それにより地域への波及効果が違うと思う。つくったらこうなる、と直線的には言いづらい。インフラまで届けば大きいけども地域への影響は出にくいのかもしれないし、そこが充分でなければ小さくても地域へのマイナスの波及効果は出やすいのかもしれない。

世界的にもギャンブリング問題対応は行われてこなかった。特に若い人達への対応を行っているのはカジノがある国と地域。数としてはたくさんあがってくるがそれを社会問題化、懸念して閉鎖したカジノはない。問題の指摘がたくさんあるがそれをもとに閉鎖したカジノがないという時、地域がリスクとして許容していると考える。何故かというと若年者など今まで手が届かなかった人の公衆衛生に手が届いたからではないか。この問題は地域がどのような形でやるかで変わると思う。外からだけか、地元の人に開放するのかでも違う。

もう一つの問題はカジノの中で起こる問題と外で起こる問題を分けて考えなければいけない。地域で既に存在しているギャンブリング問題がこれにより過熱するのかという事を考えなければいけない。韓国ではカジノが広がると同時に民間ギャンブルが爆発的に普及した。既に存在している問題への実態把握と影響把握はシビアに行うべきだし、依存問題の畑として存在している。カジノは商業要因だけが決めるわけでなく、環境要因と個人の要因とこの３つの相互作用で起こってくるのでそれぞれにどう働きかけるかで問題の起き方、対策も変わる。商業要因としてのカジノのプラスの効果、マイナスの効果が沖縄県の持っているいろいろな環境要素、個人の要素とどのように関係していくかで対策を考えていく。沖縄県は閉じているので他の都道府県よりもいいことは一つの県として影響を評価することは可能だし、その中で世界的に行われている対策を導入するとある程度の効果は期待できる。ただしカジノがある時の方が何らかの問題が増える、ただ単純にギャンブルの問題かは分からない。

【栗田氏】ありがとうございました。オルティスさんの方には先ほど白石さん、根路銘さんから指摘がありました経済、事業の視点からの懸念が提示されたと思う。この様なことがスペインで起こったのか、沖縄ではどのようなことが懸念されているのかお願いします。

【オルティス氏】西村先生と考え方は全く同感です。スペインではカジノを運営する側が様々なギャンブルに対する対策をとっている私的・公的協会と同じ側にいて対策をとっている。先ほど西村先生から依存は社会的対策と言っていたが、我々業界がとっている対策はそれらの協会と依存症に対する社会的な対策をとっている。

スペインのカジノについて知っていただきたいのはスペインのカジノ業界は行政側と非常に密接な関係を持って協力している業界である。行政側の方から非常に厳しい規制を受けそれを守りながらやっている。スペインでカジノが行われるようになり 35 年だが、1977～1979 年の開設当時、私は弁護士としてその当時カジノを始めるという事についてスペインで社会的議論が起こったという事を記憶している。社会的な議論があったが、カジノが運営されるようになって 35 年が経つがマネーロンダリングなどネガティブなことはなかったと思う。ですから、問題があるかもしれないが、それは回避できることだ。白石さんの IR の開発により既存の経済セクターでマイナス影響を受けるのではないかという指摘に対して、小さな

規模ではあるかもしれませんが大きな経済的打撃を受けるセクターは私の方では思い当たらない。時間もあるので詳しいことは述べないが依存症問題についてスペインでどのように対策して防止してきたか具体例を沖縄県の方にお話しする機会があると思う。

【栗田氏】ありがとうございます。白石さん、根路銘さんの方から事業・経済・地域セクターの相対的なデメリットのご指摘。西村先生、オルティスさんの方から依存症に対する問題に対して社会問題として顕在化しカジノだけでなく広くとらえ解決のプラットフォームをつくるべきだというご指摘を頂戴した。

日本がベンチマークとしているシンガポールの場合、これらの課題に対してどう対処したかというと、経済的事業的な面では、都市国家という側面もあったが目標の観光インバウンドを大きく伸ばし、雇用を伸ばし、税収を伸ばすという目的に対し大きな不利益を被ったセクターは一切なく国全体がプラスアルファで伸びたという総括がなされていると把握している。

依存症に対する対策に関しては、行政側の対応と民間事業者としての対応の２つの柱で対応している。行政側の対応として、自国民に対しては入場料（100 シンガポールドル／日、2,400 シンガポールドル／年）を設定して国に納付しなくてはいけない。そしてセルフエクスクリュージョン（自己排除プログラム）と言って、自分で申し込むと１年間、10 年間、あるいは一生カジノに入れない。入れてしまうと巨額の罰金がカジノ事業者に課せられるという制度がある。自分で申し出るケース、家族が申し出るケース、そして破産者並びに生活保護を受けている方は入れないというセーフティーネットを引いている。さらに自国民に対しては信用取引を禁じている。そしてカジノに遊びに行こうという広告を規制している。このように、大きく４本の柱で過度なのめり込みを防ぐ施策をとりつつ西村先生が取り組んでおられるようなリカバリーネットワーク的なコールサービスで悩んだ時に相談できる窓口を運営している。

事業者の方はリスポンシブルギャンブリングという考え方でこういった世界的な依存症に対する取り組みで、シンガポールはハーバード大とケンブリッジ大共同プログラムをつくってもらいカジノの意義も含めた全従業員が研修を受けて顧客に対応するという仕組みを導入している。そうはいうものの議論をしていくうえで課題が出てくると思う。こういったものをディスカッションの場で詰めていくことが重要なのかなと思う。

最後３順目では、総括を含め沖縄観光の将来について IR も視野に入れどのような将来像を描いていくべきかご提言を頂ければと思います。オルティスさんの方から沖縄であればどのような観光リゾートを目指せば成功すると思うかお聞かせいただきたい。

【オルティス氏】観光開発には計画調査だけでは不十分で、発展させたいという国民の意思が必要ではないかと思う。先ほどから申し上げてきたが質の高い観光を目指すべきだと思う。沖縄は既に自然を観光資源とした観光はあるが、それに加え高い観光支出を求めるためにはカジノ付の IR の開発を進めて娯楽の種類を増やすべき。ホステスバーはあるかもしれないがそれは日本人向けの夜の娯楽に過ぎず、国際観光を目指すにはもっとイベントやショーなどエンターテイメントの種類・質を増やす必要がある。つまり楽しんでもらう活動を増やすという事であり、自然の要素＋カジノ付き IR が重要になると思う。

先ほど白石さんがおっしゃったように沖縄の特異性を活かしたプロジェクトにしなければいけないという点は同感。どういう特質を生かすかはこれからの分析調査が待たれる。ですから琉球の特性を生かしたIR型国際観光だと思う。

【栗田氏】ありがとうございます。続いて西村さんの方からお願いします。

【西村氏】私はカジノそのものについては中立的に考えています。沖縄に長く住むものとして常に外に開き、受け入れ続けてきた島に住むものとして、今回は来たものをなんとなく受け入れるのではなく、初めて受け入れる前に真剣に議論している。この議論自体が既にある問題を解決する一つのきっかけになる。それから将来抱え続けるリスクを減らすきっかけになる。そこには観光を文化にする高度な知恵を集結しないと生き残れない時代になっている。その中で医療が、何ができるか根本的に考えないといけない時代になっている。これを県民みんなで考える一つの場になればそのプロセスがより良い観光の島沖縄をつくると思う。

【栗田氏】根路銘さんからも新しい沖縄の観光立県像に対する提言をお願いします。

【根路銘氏】沖縄はこれまでもこれからも観光がリーディング産業というのは間違いないと思う。その沖縄の観光の魅力を積み増していかないといけないと思う。特にIRのエンターテイメント機能については沖縄の文化観光の面からも大きく貢献していくのではないかなと思う。これまでの議論にもあったようにメリット・デメリットいろいろある。メリット、デメリットを洗い出して県民的な議論を尽くすべきだと思う。カジノについては経済合理性の他にも倫理性の問題もある。そのようなところを含めた県民コンセンサスをつくることが大事。IRに関して手を挙げているのは沖縄だけではなくライバルが多いと思う。導入するにしても、しないにしても決めるタイミングを失わないように対応しなくてはいけない。

【栗田氏】ありがとうございます。白石さんの方からもお願いします。

【白石氏】僕は覚悟の問題だと思っています。シンガポールがこれを導入したのは覚悟をもって、これが外貨獲得の大きな機になるということで舵を取った、スペインも内戦が終わった後で崩壊した経済を立て直す際に大きな機になるということで導入したと聞いている。しかし、今我々はそこまでの危機的な状況であろうか。そこに大きな危機感を持ってこれで5年後、10年後の沖縄経済を確立していくという共有が必要になる。作ることが目的になって中途半端なものをつくってしまうのは孫子の代に負の遺産を負わせてしまう事になるので、賛成派も反対派も沖縄をどう良くしていくかという視点から俯瞰して物事を考えるのが大事かなと思う。シンガポールでは世界一美しい都市というブランドイメージをつくったうえでIRに移行している。私が観光をやっていて街並みの汚さ、特に道路植栽、この程度のこともできない状態でカジノさえできればうまくいくというのは腑に落ちないところがある。推進派も非推進派もまずはカジノの議論、IRの議論をどこに据えるのかというと沖縄がこれで食っていくという覚悟をみんなで共有して、そうすると自然に今ある課題が目に入っていくと思う。そういう動きの中で同床異夢に陥らないような進め方をしていくことが肝要であると

思う。カジノ法が通りそうな雰囲気になっている、沖縄県に第２滑走路ができ物理的ボトルネックが解消されそうになっている、このタイミングなので精緻で真剣な議論の中から IR の議論を進めてほしい。みんなで考えて議論していきましょう。若い方が真剣に考えることが必要だと思う。

【栗田氏】どうもありがとうございます。これまでのカジノ・IR に関しての賛成、反対という意見だけではなく、これからの沖縄の経済のあり方、観光のあり方、これに対してカジノを含んだ IR をどう位置づけるかがこの視点が一番大事であるという指摘が共通して認識いただいたと思う。単にカジノを導入するのが目的ではない。カジノを活用した時に沖縄県の政策の中でどのような部分が実現できるのか、カジノを活用しなくても実現できるのか出来ないのか、この様な議論をしていくのが重要と受け止めさせていただいた。

今日はオルティスさんにお越しいただきました、スペインという国は国際観光インバウンドではフランスに次いで２位、国際観光収入ではアメリカに次いで２位、観光立国での大先輩で、オルティスさんが施設を持っているマジョルカ島は、沖縄本島面積の２倍、人口で半分のところに 1,000 万人をこえる観光インバウンドを招き入れており、外洋大型クルーズ船の寄港数でバルセロナ、イタリアのトリノについで世界３位と立派な観光の成績を残している。

スペインという国はここ何十年も燦燦と輝く太陽、白い砂のビーチ、きれいな自然が売り物で観光大国となった。スペインでは観光省はＧＤＰの半分を観光で稼いでいることから、経済産業省の中にある。先日スペインの経済産業副大臣と話したが、大臣は、自然、太陽、ビーチ、海、マリンリゾートはスペインの宝で、これで観光大国として成功しているがこれだけでは将来はない、ここに IR を活用するのだとおっしゃっていた。この環境は沖縄の皆様にも参考になるのではないかと思う。２１世紀の県の観光政策を県民の皆様全てがコンセンサスを持ってどういった観光立県にしていくのか、その中に IR を必要としているのか必要としていないのか早急に議論を深め結論を出すというのが待ったなしの時期に来ているのだと思う。

今日は結論として３つほどあったと思う。１つ目は、既存の事業経済、観光産業に対し IR 導入がどのような影響を与えるのか。２つ目は、スペインと同様に海洋リゾートがアドバンテージとなっている沖縄の観光において IR 導入は阻害するものなのか、両立するものなのかという視点。３つ目は、文化観光に IR が役に立つのかもしれないという視点。私は先日お亡くなりになった歌舞伎役者の市川團十郎さんと年に 10 回ほど食事をする機会があったが、団十郎さんから IR ができると歌舞伎を支えている伝統工芸、芸術、工芸品を継承する財源になるかもしれない。IR の中に素晴らしい劇場ができれば若手が世界に挑戦できる新たな取り組みができる舞台になる。伝統的な歌舞伎が息を吹き返す、IR はノアの方舟かもしれない、とおっしゃっていた。この意思は引き継がれている。こういう IR を活用した地域の文化芸術の振興も頭において無暗に引き延ばすのではなくて永田町の法律の進行を見据えながらマイルストーンを決めて議論を深めていく、このシンポジウムが端緒になればありがたいと思う。

～質疑応答～

【質問者Ａ】旅行会社に勤めている。オルティスさんに伺いたいが、シンガポールでは IR を導入した後、国の経済は観光も含め飛躍的に伸びたが、スペインでは導入前と導入後ではどう変化したかお聞かせいただきたい。

また沖縄と同様に自然を大事にして観光が発展してきたスペインで導入前と導入後でどのように変わったか教えてほしい。

【オルティス氏】まず、スペインはシンガポール、マカオに比べ投資規模はそれほど大きくないということ。ただマドリードで最近ユーロベガスという、マカオ、シンガポールに匹敵する大規模プロジェクトがある。また我が社の企業グループでもマジョルカ、スペイン南部でシンガポールに匹敵するような投資規模の IR プロジェクトを将来的に考えている段階である。スペインの場合、IR の前と後の経済的状況がどうかという質問に対して、スペインでカジノが法的に認められたのは、以前から存在した賭け事を法律で規制したうえで賭け事を法的規制の上で行うという事でスペインのカジノが生まれたのだと思う。直接的な答えにはならないが、スペインで法的にカジノが認められたのは、従来からの賭け事を規制の上で行う、そして観光の選択肢の魅力を増やし、それにより雇用を増やし観光振興を行う、税収をあげる事で社会に還元することがカジノをつくった目的だと思う。例えばカジノに対する税制から考えてもスペイン政府はカジノが大規模にならないような税制の制度をつくった。例えばカジノ収益が 1,000 万ユーロまでだと払う税金が 30%、カジノの収益が 1,000 万ユーロ以上だと税が 50%になるということで、税の制度としてカジノ活動が大きくならないようにしていたのが今までの状況である。しかしユーロベガスの場合は制度設計が変わり、事業者の払う税金は 10%になっています。投資規模が非常に大きいので新しい制度設計になっている。白石さんの意見には同意するが、カジノがあることにより琉球のような美しい島の印象が悪くなることはないというのがもう一つ言えることだと思う。

【質問者Ｂ】オルティスさんにお尋ねしたいのですが、沖縄の状況ではたして事業者が投資意欲を燃やすか、事業者が参入するかどうか可能性について、どのように考えているか？沖縄に世界の注目を引くような規模のカジノでないといけないという議論が聞こえるが、それだけの魅力が沖縄にあるのか。実際に事業をしているオルティスさんに投資的な魅力があるか沖縄の魅力についてご意見を聞かせていただきたい。

【オルティス氏】個人的には沖縄のモデルになるのはマカオではなくシンガポールだと思う。例えば沖縄の場合文化を持っている地域であり、教育レベルも高い。安全な国、県である。そういった意味でシンガポールとの類似性が高い。具体的に沖縄に投資してくれる事業者については今から指摘する２つの要素にかかると思う。カジノにかかるゲーミング税が何%に設定されるのか、そして中国人がビザなしで入場できるような法的措置がとられるのか。中国人がビザなしで入れるかによりカジノの規模は変わるが、中国人がビザなしで入れないにしても沖縄でのカジノ付き IR プロジェクトは大きな意味をもつと思う。IR 開発で日本人観光客が増えるだけでなく、台湾、韓国、ベトナム、マレーシア、フィリピン、シンガポール

から観光客が見込まれるからである。ですから中国人が入場できる、できない、どちらにしても沖縄のカジノ付き IR 開発に興味を示す海外の事業者はいると私は思う。もちろん中国人が入らないと規模は小さくなると思うが。

【栗田氏】最後にオルティスさんから事業の核心を突くお話をしていただきました。時間となりましたのでこれで終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

以上

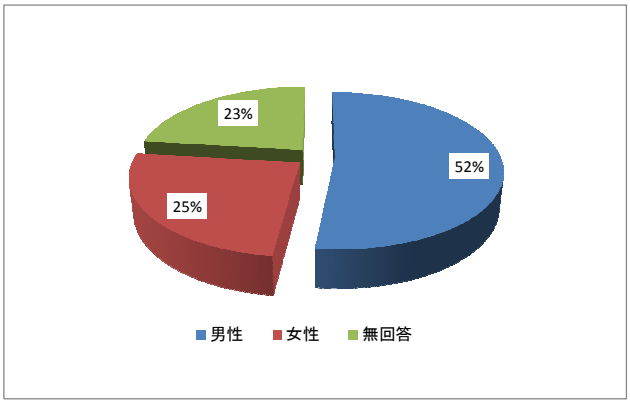
（４）アンケート結果

■回答者属性

性別については「男性」が 51.9%と過半数を超えている。

[性別]

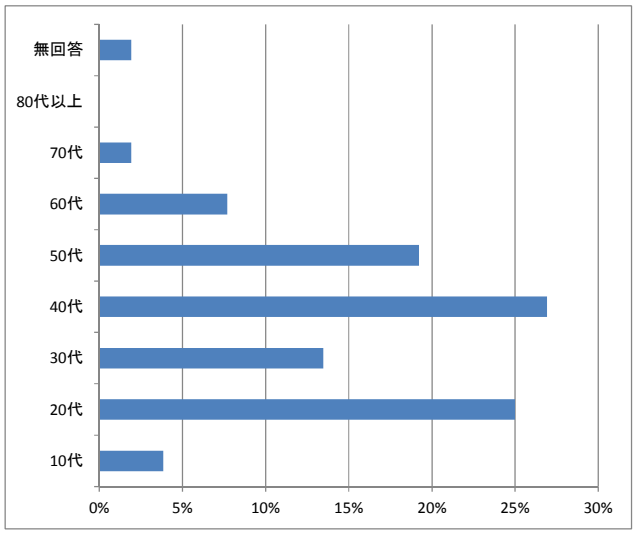
性　別	回答数	割合
男性	27	51.9%
女性	13	25.0%
無回答	12	23.1%
合計	52	100%



年齢については「40 代」が 27%で最も多く、次いで「20 代」（25%）、「50 代」（19%）となっている。

[年代]

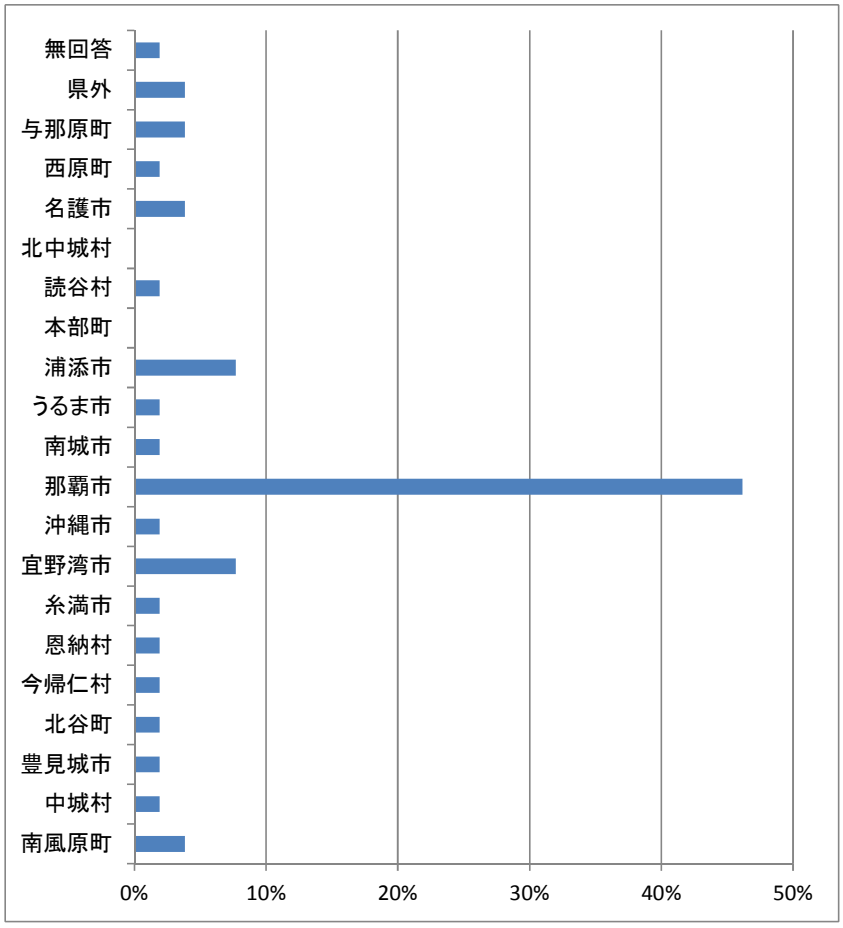
年　代	回答数	割合
10代	2	3.8%
20代	13	25.0%
30代	7	13.5%
40代	14	26.9%
50代	10	19.2%
60代	4	7.7%
70代	1	1.9%
80代以上	0	0.0%
無回答	1	1.9%
合計	52	100%



居住市町村は 46.2%で「那覇市」が最も多く、次いで「浦添市」「宜野湾市」(7.7%)、「名護市」「与那原町」「県外」(3.8%)となっている。

[居住市町村]

居住市町村	回答数	割合	居住市町村	回答数	割合
南風原町	2	3.8%	うるま市	1	1.9%
中城村	1	1.9%	浦添市	4	7.7%
豊見城市	1	1.9%	本部町	0	0.0%
北谷町	1	1.9%	読谷村	1	1.9%
今帰仁村	1	1.9%	北中城村	0	0.0%
恩納村	1	1.9%	名護市	2	3.8%
糸満市	1	1.9%	西原町	1	1.9%
宜野湾市	4	7.7%	与那原町	2	3.8%
沖縄市	1	1.9%	県外	2	3.8%
那覇市	24	46.2%	無回答	1	1.9%
南城市	1	1.9%	合計	52	100%



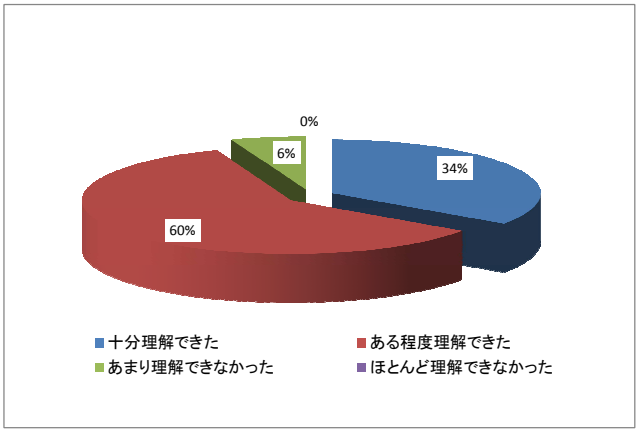
◆基調講演Ⅰ「Alegría, España@Okinawa ～スペインでの観光開発事業経験から見る沖縄での海洋リゾートの可能性～」について

Q1. 十分ご理解いただけましたか？

「ある程度理解できた」が 59.6％で過半数を超えている。次いで「十分理解できた」（34.6％）であり、両方合わせると 90％以上が理解できたと答えている。

問1　基調講演Ⅰについて、十分に御理解いただけましたか

基調講演Ⅰについて	回答数	割合
十分理解できた	18	34.6%
ある程度理解できた	31	59.6%
あまり理解できなかった	3	5.8%
ほとんど理解できなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	52	100%



Q2. 講演の内容に対しどのような感想をもたれましたか。ご記入ください。

性別	年齢	居住地	回答内容
女性	20 代	南風原町	カジノをする場所という事だけではなく、人々の集まる場所としてこういった場所をつくることはいいことだと思います。社会に溶け込んだ形にすることが重要だと思います。
女性	20 代	糸満市	スペインの陽気な性格と沖縄の明るい性格が同じと聞いて、もしカジノや他の施設ができたとき、その県民の良さは出せるのか？と思いました。カジノやリゾートホテル＝スキルの高いホスピタリティ県民にスキルを植え付けて、県民（スペイン？）の素材は（気さくな態度 etc）使っているのか。
	20 代	中城村	スペインにカジノが 40 カ所もあるのは意外。カジノだけでなく、スポーツやスパなどの複合施設でエンターテイメントの種を広げているのが最も良い印象を受けた。
男性	20 代	宜野湾市	スペインでは盛んにギャンブル（カジノ）が行われていることが分かった。他の経済には悪影響を与えないとのことだったが、どうしてスペインは経済難として問題視されているのか、カジノは関係ないのかという疑問を持った。
男性		県外	アメリカ、シンガポール等の IR については、いろいろなセミナー、シンポジウム等で紹介されるが、スペインの成功事例が聞けて良かった。参考になった。
男性	50 代	那覇市	スペインと沖縄の文化・人種の違いの中で同じやり方でうまくいくか？現在まで至った解決法を知りたかった。
女性	20 代	南風原町	ミゲルさんが述べた、沖縄に足りない部分に挙げた語学教育、エンターテイメントについては私も共感する部分があった。サンセバスティアンではカジノ文化が伝統としてあったと聞いたが、その伝統がなかったマジェルカにカジノができたときの住民の反応はどのようなものであったか気になった。
	50 代	那覇市	30 年間の長期スパンで観光開発に共鳴した。沖縄も長期的理念を見据えて、各施策の進行が必要と考える。
男性	60 代	那覇市	スペインと沖縄の観光客誘致のファクターが
女性	20 代	西原町	カジノは治安が悪くなることを考えて反対だったのですが、本日のシンポジウムに参加して考え方が変わりました。

性別	年齢	居住地	回答内容
男性	10 代	那覇市	スペインの観光が成功した根本的な要因はスペイン人の性格、人柄という事であったことが分かった。
男性	20 代	那覇市	スペインは観光大国であり、スペインの観光を参考にし、沖縄にも良い影響を与えて欲しい。
男性	60 代	北谷町	IR からの社会貢献はないのでしょうか？宝くじ財団の事例？
男性	50 代	宜野湾市	話題がカジノに偏っていたので、もう少し海洋リゾートのあり方について触れてほしかったです。
男性	40 代	那覇市	IR の意味が理解できた。
男性	40 代	那覇市	GOOD
男性	30 代	那覇市	時間が足りない感じがしました。もっと IR の事例（助成、失敗）が知りたいと思いました。→後半のディスカッションで聞けたので良かったです。
	40 代	豊見城市	多様なコンテンツの観光産業においてレベルアップしてこそ沖縄の IR を成功できるのではないかと思った。
男性	50 代	那覇市	少しカジノのようなイメージ規模も小さい。沖縄にはシンガポールのようなカジノは巨大すぎて向かないのか？
男性	50 代	浦添市	良いアドバイザーになるのか？開発当事者になるのか？
男性	40 代	浦添市	大変好意的で感銘を受けた。もっと具体的に自分なら沖縄にこんな IR をつくるというトライアル(意見発表)があれば、もっと良かったと考える。またもっと厳しい話も必要。ミゲル氏に深く感謝。今後も何らかの関わりを持って頂ければ嬉しい。通訳の方はレベルが高いと思います。
	40 代	那覇市	世界という大きな視点からカジノを考えることができた。素晴らしかった。感謝です。
女性	30 代	那覇市	ギャンブリング等のマイナスイメージが先行する IR の魅力的な側面を実例から紹介いただき説得力があった。
男性	50 代	うるま市	あらゆる観点から講演していただき具体性のある意見であった。
女性	20 代	那覇市	海外におけるカジノや IR 事業について知ることができ、新たな視野で考えるきっかけになったと思う。ミゲルさんがおっしゃっていた沖縄に足りないもので外国語能力（英語）が低いことは、外国人観光客を誘致していこうとしている。沖縄にとって重要な課題であると思いました。スペイン人と沖縄人の共通点には納得したのですが実際に IR 事業を進めていって同じように成功するのかどうかは保証されていないと思った。
女性	20 代	宜野湾市	スペインにおけるカジノ開発の目的が人に集まって楽しんでもらうという事だったのでカジノのマイナスイメージが少なくなった気がします。品質の良いハイクオリティーな観光について考えていきたいと思います。
女性	20 代	与那原町	「品質の良いハイクオリティの観光を目指すべき」と言っていたが、それがカジノとどの様につながるのか良く分からなかった。
女性	10 代	与那原町	カジノを成功させるために様々な対策を絞っていたことを知り良かったです。そして日本にスペインと同じようなカジノを持ってくることは出来るのだろうか、という疑問を持ちました。
女性	20 代	読谷村	スペインへのカジノのイメージが全くなかったためとても勉強になった。マカオに行ったことがあるが、またマカオとは異なったカジノ産業へのイメージを持った。
女性	20 代	那覇市	スペインにはたくさん観光資源（文化・歴史的な）があることは知っていたがその中の一つとしてカジノ・IR があることに驚いた。既存の観光資源が IR・カジノによって埋れていない（少なくとも私のスペインのイメージは文化・歴史的建築である）のが、いい意味でのギャンブルとの共存であると考える。
女性	40 代	名護市	紹介部分のウェイトが大きかったので時間が無くなってしまったのが残念
男性	30 代	県外	沖縄モデルの相似モデル事例をもっとトレースすべきだと思った。
男性	40 代	那覇市	スペインでの成功事例を目指したい方向性は理解できるもカジノ付の

性別	年齢	居住地	回答内容
			展開については、やや疑問、違和感が多少あり。カジノをするにしても、観光と地元の住み分けを要する。例えば大型クルーズカジノ船など完全導入前の施策の検討が必要か。失敗事例はないか、あればそこから議論の余地あり。各ホテル単体での導入なら良いが。
男性	50 代	那覇市	レジュメと話の内容に差がありすぎる。スペインでのカジノ、マジョルカとの類似性など聞きたいことに答えていない。
	50 代	那覇市	カジノがなければ IR ではないのか?無くても統合リゾートなのでは？また韓国、中国、インドネシア等あるのになぜ日本はカジノ･･･か？
女性	40 代	那覇市	とても面白いと思いました。ヨーロッパ並みの質のよい観光に興味があります。
男性	40 代	那覇市	いまだ“可能性”について論じている。沖縄カジノ論は正直興味がないが、実際に開発･運営で成功している世界の成功例を提示し啓蒙することが導入へのコンセンサス形成につながる。素晴らしい。

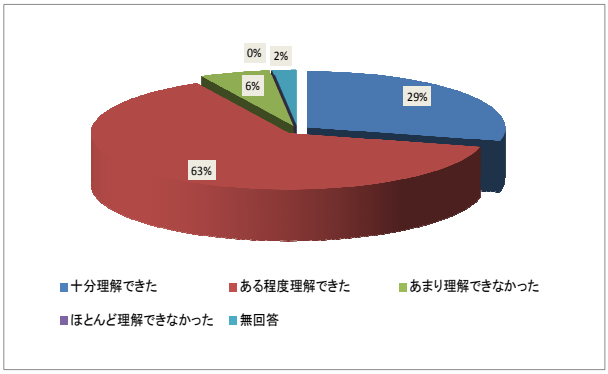
◆基調講演Ⅱ「日本におけるギャンブリング問題について」について

Q3　十分に御理解いただけましたか。

「ある程度理解できた」が 63.5％で過半数を超えている。次いで「十分理解できた」（28.8％）であり。両方合わせると 90％以上が理解できたと答えている。

問3　基調講演Ⅱについて、十分ご理解いただけましたか

基調講演Ⅱについて	回答数	割合
十分理解できた	15	28.8%
ある程度理解できた	33	63.5%
あまり理解できなかった	3	5.8%
ほとんど理解できなかった	0	0.0%
無回答	1	1.9%
合計	52	100%



Q4. 講演の内容に対しどのような感想をもたれましたか。ご記入ください。

性別	年齢	居住地	回答内容
女性	20 代	南風原町	日本にはギャンブルの定義がないためにカジノの賛否両論があるのだと思いました。ギャンブルがあることによって生まれる効果や影響に関するデータをもっと集めることが必要だと思います。
女性	20 代	糸満市	なぜ沖縄にギャンブリング問題専用の電話相談所を開設したのか、それは、いま日本で「沖縄観光立国」とし、「世界水準の統合リゾート」を見据えた上でだが、日本にははっきりとしたギャンブルの定義（研究）なし、まずはそこから。
	20 代	中城村	ギャンブルに対し、固定概念を持っていたことが分かった。依存対策整備が沖縄に必要。
男性	20 代	宜野湾市	日本はギャンブルに対しての制度がとても弱く、定義があいまいで、議論が難しい。また確かなことが分かっていない。ギャンブルと病気。私はギャンブルだけで生活しようと思ったことがないのでギャンブル依存症の人の考えはわからない。だがギャンブルで生計を立てようとしている人が異常とは思う。
男性		県外	日本のギャンブリング問題を依存症問題の視点から詳細に説明され非常に参考になった。
男性	50 代	那覇市	ギャンブル依存問題は仕組みとインフラが関係しているのは分か

性別	年齢	居住地	回答内容
			った。
女性	20 代	南風原町	ギャンブル依存症など何気なく使っていたが、しっかりとした定義がないことに驚いた。これから行われる基礎データ作りができることが、この統合リゾート計画においても重要になるのではないかと思う。
男性	60 代	那覇市	沖縄のギャンブリング性向についてもっと深く知りたいと思った。ギャンブリングと“トバク”の違いが良く分からなかったが専門的対策もあれば IR も進展するという理解した。
女性	20 代	西原町	ギャンブリングによる影響にはタイプがあるという事、カジノを導入する際には悪影響を最小限にしなければならない。
男性	10 代	那覇市	ギャンブルの基本的概念がないという事が話をややこしくする。
男性	20 代	那覇市	ギャンブル依存症に対して、あいまいな定義でしかないことに驚いた。カジノ施設を設置する際、必ずと言っていいほど依存症の問題が出てくると思うので医学によるちゃんとした定義が必要だと思う。
男性	60 代	北谷町	時間が短い
男性	40 代	那覇市	ギャンブリング問題の内容が理解できた。
男性	40 代	那覇市	ＧＯＯＤ
	50 代		日本全体の実態調査が早急に必要だと感じた。
男性	30 代	那覇市	とても興味深い内容でした。もっと詳しく聞きたいです。[ギャンブリング」という言葉の意味が良く分かりました。今まで誤用していました。
	40 代	豊見城市	前者のミゲル氏は自国においてギャンブリング依存者たちのことをどう思われるのか？と思った。パネルディスカッションでミゲル氏が言った県と話し合う場（依存者についての対策）を詳しく知りたい。
男性	50 代	那覇市	ギャンブリングの定義よりも医学的な面からの解説をしてもらいたかった。
男性	50 代	浦添市	ギャンブリング問題に対する環境整備は精力的に進める必要があると感じた。
	30 代	南城市	県民の宝くじや TOTO 等への関心が高いことに驚いた。地域によって特徴があることを知った。
男性	40 代	浦添市	恐らく事務局側の要望でおおよその内容が決まっていると思うが、問題を起こさないための外的環境の整え方の方が大切というか、関心ごとだったのではないか？
女性	30 代	那覇市	メリット・デメリットの両方が示され、様々な意見を聞くことができた。何をポイントに今後考えを深めていけば良いのか、まとめていただけたのが良かった。
女性	20 代	那覇市	沖縄のギャンブリング参加率が低いという事は意外だった。でも IR 導入後に、現在よりは多くの問題が出てくることは明らかであると思うし。既に存在している問題を悪化させることにならないか不安である。しかし西村さんがおっしゃっていたようにリスクマネジメントの面からギャンブリングの問題に対して対策をしっかりしていくことができれば問題を大きくしすぎないことはできるのではないかと思い、今までよりは不安要素が減った。
女性	20 代	宜野湾市	現在ギャンブリングに関する問題はカジノだけではなくオンラインゲームまで広がっている。SNS と広く利用した対策が必要であるというところがありましたが、具体的にどの様にするのかとても興味があります。
女性	20 代	与那原町	沖縄のギャンブル参加率が低いという事には驚きました。
女性	10 代	与那原町	ギャンブル依存症について、まだはっきりしていないということ

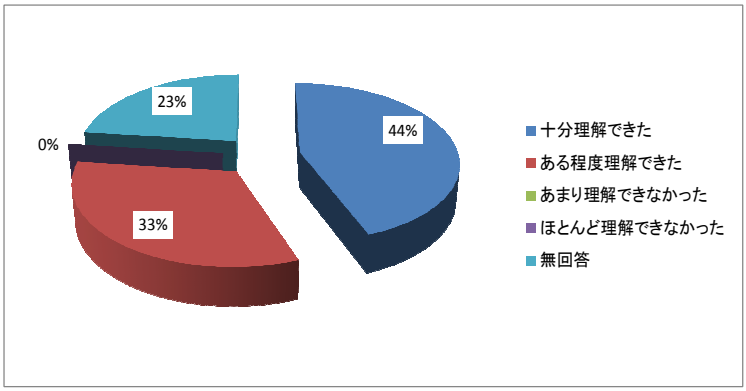
性別	年齢	居住地	回答内容
			を知り、しっかり対策を練るべきだと感じました。
女性	20 代	那覇市	まず[ギャンブル依存症]という概念が確立していないという事に驚きを覚えた。私たちは気軽に使っていたが具体的な症状やデータがないのに使っていてまだまだ勉強不足だと思った。またその対策として社会的インフラが挙げられていたのはとても意外でその具体例を聞いてとても納得できた。(沖縄に鉄道が必要かと言われたら議論の余地があるが)
女性	40 代	名護市	もう少し詳しく聞きたかった（時間が足りない）
男性	30 代	県外	依存症にかかる法整備も IR 推進法成立と歩調を合わせていく必要性を感じた。
男性	50 代	那覇市	ギャンブラーのリカバリーについて良く分かった。これからどうするのかもっと聞きたい。
	50 代	那覇市	カジノ＝ギャンブル(賭博)？ 公営ギャンブル（競馬・競艇・競輪）とどこが違う？
男性	40 代	那覇市	この議題の講演には興味がない。

Q5　パネルディスカッションについて、十分に御理解いただけましたか。

「十分理解できた」が 44.2%で最も多く。次いで「ある程度理解できた」（32.7%）であり。両方合わせると 76%以上が理解できたと答えている。

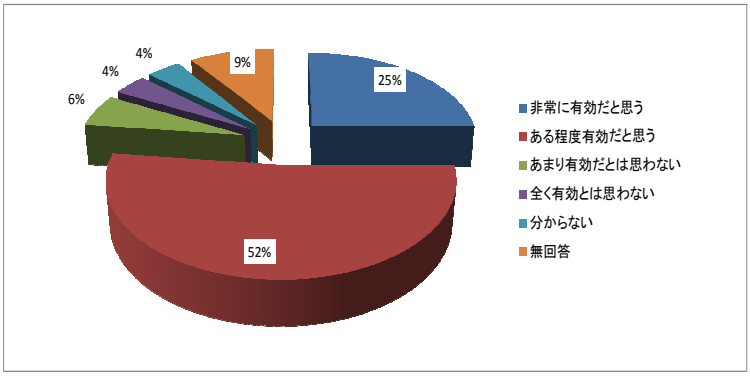
問5　パネルディスカッションについて、十分に御理解いただけましたか？

パネルディスカッションについて	回答数	割合
十分理解できた	23	44.2%
ある程度理解できた	17	32.7%
あまり理解できなかった	0	0.0%
ほとんど理解できなかった	0	0.0%
無回答	12	23.1%
合計	52	100%



Q6　世界水準の観光リゾート地の形成を目指す沖縄県にとって、統合リゾートは有効だと思いますか。

「ある程度有効だと思う」が 51.9%で最も多く。次いで「非常に有効だと思う」(25.0%)、「あまり有効だとは思わない」(5.8%)と続く。

問6　世界水準の統合リゾートを目指す沖縄県にとって統合リゾートは有効だと思いますか？

統合リゾートの有効性	回答数	割合
非常に有効だと思う	13	25.0%
ある程度有効だと思う	27	51.9%
あまり有効だとは思わない	3	5.8%
全く有効とは思わない	2	3.8%
分からない	2	3.8%
無回答	5	9.6%
合計	52	100%